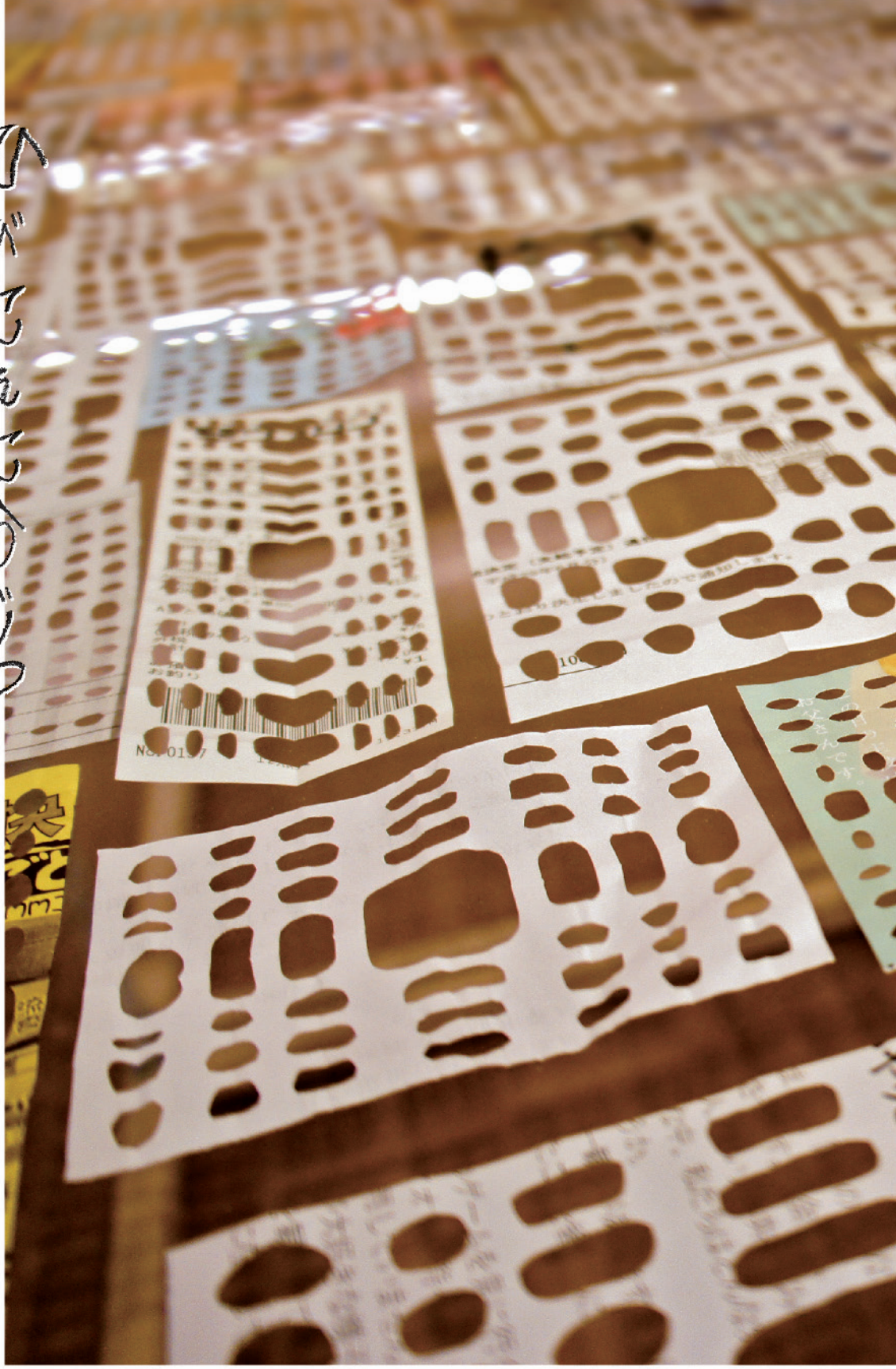
日々是好日

ひびこれこうじつ

HIBIKORE
KOJITSU

暮らしから
生まれるもの



NASC
NIIGATA ART BRUT SUPPORT CENTER

新潟県アール・ブリュット・サポート・センターNASC
報告書

厚生労働省「平成28年度障害者の芸術活動支援モデル事業」

日々是好日

暮らしから生まれるもの

新潟県アール・ブリュット・サポート・センターNASC
報告書

1 がいよう

8 新潟県の概要
9 NASC について
10 NASC の取り組み
12 協力委員会について
13 コラム
宮下 東子　新潟県立近代美術館 学芸課長代理

2 そうだん

16 相談支援について
17 相談事例１～５

3 めぐる であう そだてる

24 アーティストの発掘・調査
25 ワークショップ
「身近にある作品を自慢する会」
26 発掘調査 in 佐渡
28 人材育成について
アール・ブリュットセミナー in 長岡
29 障がいとアートをつむぐ つくるを支えるセミナー
30 障がいとアート つくるに関する法律研修会
はじめての権利擁護
著作権とは？
31 アール・ブリュットについての視察研修

4 ひろめる

34 展覧会
「アール・ブリュット展 in 上越」
37 同時企画
「記録映像上映アール・ブリュットが生まれるところ」
38 展覧会
「ART BRUT at SHIBATA － モノ、ガタル、タネ －」
40 展覧会
「日々是好日 暮らしから生まれるもの」
42 コラム
小出真吾
44 コラム
井上多枝子　特定非営利活動法人はれたりくもったり アートディレクター
45 コラム
足立裕介　社会福祉法人中越福祉会　障がい者就業・生活支援センターこしじ
46 展覧会
「障がい・アート・ミーティング」
52 県内の取り組み
「まちごと美術館」
53 県内の取り組み
「アートキャンプ」

5 そのあと

56 **インタビュー　嵯峨谷正敏**
60 **インタビュー　石栗仁之**
65 コラム
渡辺 茂樹　新潟県障害福祉課 地域生活支援係長
66 **インタビュー　のぞみ工房**
70 **インタビュー　石塚 香菜**

6 さっかたち

78 作家紹介

7 巻末資料

88 広報資材資料
89 情報発信について
90 メディア掲載情報

はじめに

社会福祉法人みんなでいきるでは「平成28年度厚生労働省障害者の芸術活動支援モデル事業」の採択を受け、今年度、活動をしてまいりました。このモデル事業は障害のある作者やその家族、障害のある人たちの造形活動を支援する人たちを支える様々なプログラムを実施し、そのノウハウを積み上げて、全国に普及していくことを目的としています。

私たちはこのモデル事業の採択の後、障害者の芸術活動を支援する中間支援組織「新潟県アール・ブリュット・サポート・センター（Niigata Art Brut Support Center：NASC「ナスク」）を立ち上げ、このセンターを中心にモデル事業を推進してまいりました。

本モデル事業では美術活動に取り組む障害者やその家族、支援者に対する支援を推進するため、障害者による美術活動への支援方法や著作権保護に関する相談への対応、美術活動を支援する人材の育成、関係者のネットワークづくりや、展示会の開催を行う「障害者芸術活動支援センターの設置」と本モデル事業の実施状況の確認や事業実施の協力を新潟県障害福祉課、新潟県文化振興課、新潟県立近代美術館学芸員、障害福祉施設関係者、市民活動団体、弁護士などで構成される「協力委員会」を設置いたしました。

新潟県という地域において障害のある方々の表現のための場はまだまだ取り組みが進んでいない状況にある中で、このモデル事業を通じて得た成果は非常に大きかったと感じています。多くの関係者の皆さまからのご協力により、この事業を通じて大変に手応えのある成果を残すことができました。その成果をこの報告書にまとめましたのでご覧ください。

社会福祉法人みんなでいきる
理事長　大島誠

障害のある方々の生活支援を行なってきて15年ほどになります。これまでずっと障害のある方々の暮らしは福祉サービスを整えることで支えられると考えてきました。しかし一方で人の暮らしはサービスだけでは満たされることはないのではないか、とも考えてきました。その思いは障害のある方々の生み出す表現を目にするたびにますます強くなってきました。

障害のある方々の生み出す表現・造形になぜこれほどまでに心を奪われるのか、それは今も分かりません。でも確実にいえるのは多くの表現が私たちの心の奥底を揺さぶり、いつもまでも消えることのない感触を保ち、心の中に残り続けるという事実があるということです。それは表現の根源であるようにも思いますし、さらに踏み込めば生きることそのものであるようにも思います。

こうした表現に心を寄せ、新潟県内全域において障害のある方の芸術活動の芽を広げて行きたい。今回のモデル事業に挑戦したのはそんな思いが我々の中にあったからです。この事業を通じて、新潟県内の障害のある作家に多く出会いました。そして周囲の支援者や家族の声もたくさん聞くことができました。そんな風に出会った作品を展示し、多くの方々の目に触れる機会を作ることができました。初年度の取り組みということで手探り状態ではありましたが、そんな中でも確かな手応えを感じることもできました。

このモデル事業では、福祉行政関係からのご協力はもちろんのこと、文化行政関係者、美術館・博物館関係者、弁護士、芸術家、企業経営者など福祉の世界に浸っているだけでは繋がることのできない多くの方々とのネットワークを構築することができました。このモデル事業を実施しての大きな成果はまさにそこにあったと思います。

平成28年度、新潟で起きた障害者芸術文化活動の軌跡を、この報告書を通じて辿ってみたいと思います。

新潟県アール・ブリュット・サポート・センター NASC　センター長
社会福祉法人みんなでいきる　副理事長
片桐公彦

暮らしから生まれるもの

障がいのある人が作り出すものがあります。
素朴な色、大胆な線、繊細な形、圧倒的な量。
福祉施設や家庭の中で、当たり前となっている物も
時に外に向けて展示された結果、多くの人の心を揺さぶり、
障がいある人と社会との新たな接点となることがあります。

つくる人、周りの人、できる物

障がいある人の作品は周りの人との関係の中で生まれています。例えば、コミュニケーションが難しい作者に対して周りの人が画材を揃える際に、サインペンを渡すのか、絵具と筆を渡すのかで出来上がる作品は大きく異なってきます。

“彼にとって、作品にとって、何が良いのか”周りの人は様々な判断を問われることになります。



がいよう

新潟県アール・ブリュット・サポート・センター

NASC ってなに？

これからの地域福祉とアートのために

創作を支える人と共に、様々な問いに向きあいながら障がいある人と社会とのより良い接点をつくっていくこと。

新潟県アール・ブリュット・サポート・センターNASCはそんな思いをもってはじまりました。

アール・ブリュットとは？

アール（Art）は「芸術」、ブリュット（Brut）は「磨かれていない（加工されていない）生のままの」という言葉を表すフランス語です。文化的な伝統や流行、教育などにとらわれず、独自の発想と方法により制作した作品のことを指します。

新潟県の概要

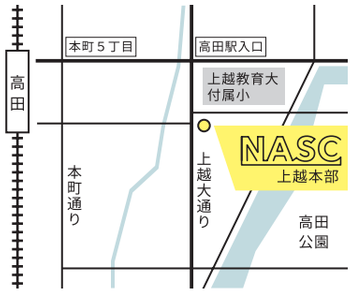
新潟県は、本州の日本海沿岸のほぼ中央部に位置し、人口約229万人（平成28年4月1日現在）を有する県です。

47都道府県で第5位の広大な面積を有するため、上越地方、中越地方、下越地方、佐渡地方の4地域に大きく分けられています。平成の大合併により平成12年度は112あった市町村が、平成22年度には30市町村になり、より行政が広域化しています。

山間部は全国有数の豪雪地帯であり、冬期間は全県を通じて日照時間が少なくなります。米どころとして有名であり、日本酒をはじめ米を中心とした食文化が発展しています。









広がる取り組み

新潟県内の障害者の芸術文化活動については、長年、行政、社会福祉法人、NPO法人やボランティア団体などが独自の活動を行ってきました。

新潟県障害者交流センターにおいては、「ふれあアートチャレンジ」を平成13年から開催しており、障害者の文化活動の支援を行っています。

また、平成22年にはフランス・パリ市の「アル・サン・ピエール美術館」で開催された「アール・ブリュット・ジャポネ展」の国内巡回展が新潟市美術館において日本国内で2番目に開催した実績があります。こうした取り組みに触発され、アール・ブリュット展を、社会福祉法人やNPO法人が中心となり新潟県内各地で開催しています。

平成23年には新潟に暮らすの障害のある人々の創造活動を豊かにするための活動を行う団体「アートキャンプ新潟」が設立され、福祉事業所への訪問、企画展・ワークショップの開催、調査事業などを展開しています。こうした活動が福祉事業所のみならず徐々に市民レベルに浸透しつつあります。

課題

ただし、こうした取り組みは地域ごとの取り組みで終わってしまい、活動の広がりや次へのステップにつながらなかったという課題があります。

一方で、障害者芸術文化活動の取り組みへの気運は東京オリンピック・パラリンピックの開催なども踏まえ、ここ数年で高まっています。活動が広がり、分野も芸術活動だけでなく芸能・パフォーマンスなど多様化する中で、作品の取り扱いや作者の権利関係の問題、また総合的なディレクションをできる人材の育成や発掘といった課題も出てきました。

点と点をつなぐ

こうした流れを受けて、新潟県内の障害者芸術文化活動に関する情報共有や意見交換、人材育成などを目的とした任意団体「新潟県アール・ブリュット・ネットワーク」を平成27年7月に設立しました。現在は上越市、柏崎市、三条市、長岡市、新潟市、新発田市の社会福祉法人、NPO法人などで構成し事務局を「社会福祉法人みんなでいきる」内に設置しました。意見交換や情報の共有、イベント開催などを積極的に行っています。

NASCの設置

点と点を結ぶ取り組みを一層強化させ、新潟県内の障害者芸術文化への取り組みを広げていくために、厚生労働省の事業である平成28年度障害者の芸術活動支援モデル事業に申請を行いました。結果採択を受けることができ、平成28年8月1日に、「新潟県アール・ブリュット・サポート・センターNASC」を設置しました。NASCの事業概要は左記のとおりです。

NASC

NIIGATA ART BRUT SUPPORT CENTER

新潟県アール・ブリュット・サポート・センター NASC

【上越本部】

〒943 - 0834

新潟県上越市西城町2 - 10 - 25 大島ビル307号室

社会福祉法人みんなでいきる法人本部内

TEL：025 - 530 - 7260 / FAX：025 - 530 - 7261

○サポートセンター開設時間

月曜日から金曜日 8:30 - 17:30（土日祝日は閉所）

【新潟サテライト】

〒951 - 8061

新潟県新潟市中央区西堀通6番町885

主なすくのとりくみ



1 人材の育成・研修事業

福祉施設関係者、教育機関、美術関係者向けに障害者芸術文化活動に関する研修、ワークショップなどを開催し、障害者芸術文化に関わる人材を養成しました。

【実施した事業】
◎アール・ブリュットセミナー in 長岡
　日時：平成 28 年 8 月 19 日（金）
　内容：概論・実践報告・ワークショップ
◎アール・ブリュットでまちづくり
　日時：平成 28 年 10 月 1 日（土）
　内容：概論・シンポジウム
◎障がいとアートをつむぐ
　つくるを支えるセミナー
　日時：平成 29 年 2 月 25 日（土）
　内容：概論・権利擁護・ワークショップ



2 権利関係の研修

作品の権利関係に関する意識がまだ醸成されていない状況があることから、著作権や権利擁護に関しての研修会を開催しました。

【実施した事業】
◎障がいとアートをつくるに関する法律研修会
　―はじめての権利擁護―
　日時：平成 28 年 11 月 1 日（火）
　内容：著作権の基本的理解
　　実践報告・トークセッション
◎障がいとアートをつむぐ
　つくるを支えるセミナー（再掲）
　日時：平成 29 年 2 月 25 日（土）
　内容：概論・権利擁護・ワークショップ



3 発掘・発信

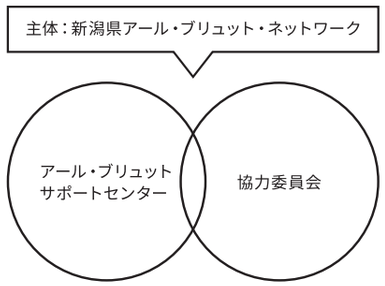
新潟県内において開催される企画展の開催に向けての支援とアーティストの発掘を行いました。

【実施した企画展】
◎アール・ブリュット展 in 上越
　～この世界の愛し方 Everything is in this world ～
　日時：平成 28 年 7 月 23 日 - 8 月 14 日
◎新発田アール・ブリュット展 2016
　～モノ、ガタル、タネ～
　日時：平成 28 年 10 月 1 日 - 5 日
◎障がい・アート・ミーティング
　～彼の描く、セーラームーンの面白みは、伝わるか～
　日時：平成 28 年 10 月 22,23 日
◎アール・ブリュット展 in 長岡
　～日々是好日 暮らしから生まれるもの～
　日時：平成 28 年 11 月 19,20 日
【発掘調査の実施状況】
◎発掘調査を行った市町村
　新潟市、長岡市、上越市、柏崎市、新発田市、加茂市、燕市、糸魚川市、妙高市、佐渡市胎内市、弥彦村
【情報発信】
◎ HP の開設・更新
◎ Facebook ページの開設・情報発信

4 協力委員会の設置・開催

新潟県内で障害者の芸術文化活動の普及啓発のために文化芸術関係の専門家や行政、福祉関係者で構成される協力委員会を設置し、NASC で実施する事業について審議・助言をもらいました。

【協力委員会の設置】
10 名の委員で構成
【開催状況】
◎第 1 回　平成 28 年 7 月 23 日（土）　上越市
◎第 2 回　平成 28 年 10 月 3 日（月）　新発田市
◎第 3 回　平成 28 年 2 月 25 日（土）　上越市



■得られた効果

一番の効果は専属のスタッフを置いたことで、相談の窓口が明確になったこと。事業所や家族・本人からの相談をたらいまわしにすることなく、しっかり受けとめる基盤ができたことは新潟県における障害者の文化芸術活動の普及啓発に大きく寄与したと言えます。加えて、いただいた相談に対し、迅速に対応することができるようになり、地域の特色を活かした企画展や研修会の実施ができました。

協力委員会の開催

アール・ブリュットの普及啓発をバックアップしてもらうために、先駆的に障害者の文化芸術活動を推進している団体で構成する協力員会を設置しました。

広域的な新潟県をカバーできるよう下越地域・県央地域・中越地域・上越地域からバランスよく、また福祉関係者だけでなく弁護士・学芸員から委員に就任してもらい専門的なアドバイスをいただきました。今年度は3回開催し、開催状況については左記のとおりです。

第1回 協力委員会

日付：平成28年7月23日（土） 14：00～16：00
場所：新潟県上越市
　　あすとぴあ高田5階ミュゼ雪小町多目的室
参加人数：8名　オブザーバー：3名

◆議題
（1）平成28年度 障害者の芸術活動支援モデル事業の概要について
（2）新潟県障害者芸術活動支援センター（新潟県アール・ブリュット・サポート・センター）の開設と事業について
（3）調査報告

第2回 協力委員会

日付：平成28年10月3日（月） 13：00～14：30
場所：新潟県新発田市
　　社会福祉法人のぞみの家 福祉会さんさん館i
参加人数：6名

◆議題
（1）支援センター業務に関する中間報告
（2）モデル事業の進捗状況の報告
（3）企画展について
（4）その他

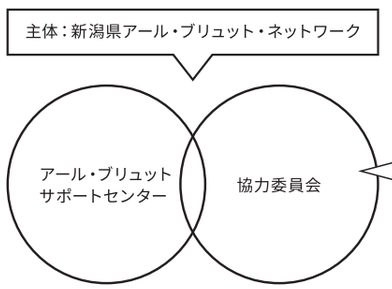
第3回 協力委員会

日付：平成29年2月25日（土） 10：00～12：00
場所：新潟県上越市
　　あすとぴあ高田5階ミュゼ雪小町多目的室
参加人数：10名　オブザーバー：2名

◆議題
（1）第2回 協力委員会での課題について
（2）モデル事業の進捗状況の報告
（3）報告書の作成について
（4）次年度事業について



主体：新潟県アール・ブリュット・ネットワーク



協力委員会委員

大島　誠　社会福祉法人みんなでいきる理事長
高井　進　陶芸家・はり絵作家 岡田清和さんを支援する会 会長
樺沢　浩　社会福祉法人のぞみの家福祉会常務理事
涌井幸夫　新潟県知的障害者福祉協会副会長
近　　守　アートキャンプ新潟代表
渡辺茂樹　新潟県障害福祉課地域生活支援係 係長
藤井哲夫　新潟県県民生活・環境部 文化振興課文化政策係 係長
宮下東子　新潟県立近代美術館学芸課長補佐
市川高子　上越市立小林古径記念美術館学芸員
見竹泰人　弁護士・森直樹法律事務所

協力委員会を組織化し、委員の方から自発的に活動に参画していただいたことで研修会の企画実施、展覧会の開催など活動に拡がりができました。

あわせて専門的な見地から、ディレクション業務の定義づけや、作品使用に係る許諾事務の方法など多くのアドバイスをいただきました。

コラム

新潟県立近代美術館
学芸課長代理　宮下 東子

私はこれまで、少しずつ障害者アートに触れる機会がありながらも、それほど深く関わってはきませんでした。このたび、NASCの活動の端っこに関わることになり――それでも深く関わったとはとてもいえないのですが――強く感じたのは、〈愛〉の一言に尽きます。

第1回の委員会で、活動の目的について質問した時の、NASCセンター長・片桐氏の「障害者に光が当たればいいなと思って」という言葉が印象的でした。また、障害者をサポートしている人たちが、自身がサポートしている障害者の輝く姿を一生懸命にアピールする姿にも心打たれました。〈生きる〉とはどういうことなのか、改めて考えさせられてしまいました。

それにしても、「芸術」っていったい何なのでしょうか。一説によれば、「内的価値によって人の心を動かす」ものなのだとか。ポコラート※審査員で美術家の会田誠氏は、そのコメントで「とにかく、なんかすごい！と思いました」と書いています。この、「なんかすごい！」という感じは、今回の活動で紹介されたり発掘されたりした人たちの作品すべてに当てはまるのでしょう。そしてそれは、その作品が誰かに見せようとして作ったわけではないモノで、それを生みだした人の生きている証そのものだからなのでしょう。

私たちがこれまで見過ごしてきた「なんかすごい」人たちが発掘されて、それが、健常者とうまく手をつなぐことができるようになる手段や仕組みができればよいと思います。

※ポコラート
「障がいのある人、ない人、アーティストが、核心の部分で相互に影響し合う場（Place of"Core+Relation ART"）」という理念をしめす造語。2010年にアーツ千代田 3331と千代田区の障がい者アート支援事業として始まり、様々な表現者がアートの根源で交わり理解し合う場を作り出すことを目的としている。現在は、障がいあるなし関係なく、あらゆる形の芸術表現の新境地を切り開き、可能性を開く人々が切磋琢磨し競い合う場所として、障害者もプロの作家も様々な人が参加している。

そうだん

話を聞くこと
それに応えること

2



そうだん

相談支援

障がいのある方やその家族、福祉事業所などからの相談に対応するため、窓口を設置しました。初年度の取り組みであったため、当初は相談もほとんどない状況でしたが、メディアで取り上げられたり、企画展・研修会を通じてＮＡＳＣの認知度が上がることによって徐々に相談件数も増えてきました。

相談件数延べ　144件
（平成29年3月末日現在）

相談例

・美術経験はないけれど油絵を描いてみたいので、教室などがあれば教えてほしい。（当事者）

・自分の作品の作風が分からなくなっていて、現状どうしたらいいかわからない。（当事者）



・市内の公共施設で作品を常設したいと考えているが、どこにどのようにお願いしたらいいか教えて欲しい。（自治体）

・自社が主催するイベントにアール・ブリュット作品を展示したいと思うが、協力をしてほしい。（一般企業）

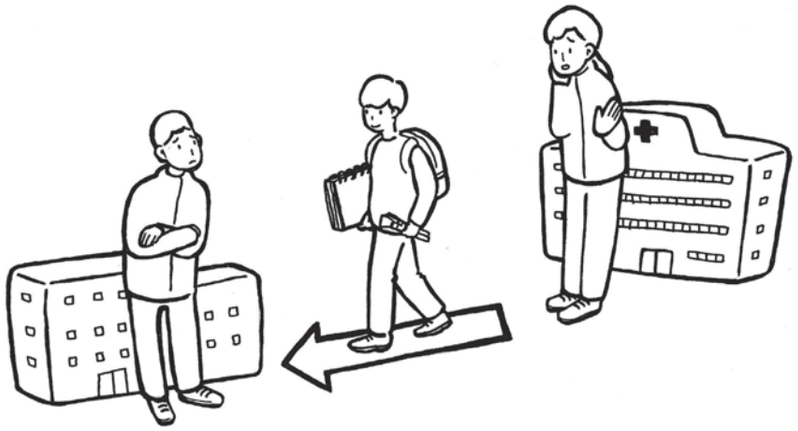


・知り合いの支援者が展覧会を開催するが、その広報をお願いしたい。（一般市民）

・法人内で展覧会を行う際に「アール・ブリュット」という名称を使用してもいいか教えてほしい。（施設職員）



相談事例1



施設が変わっても
創作活動を続けさせてあげたい！

相談者

障害者支援施設職員

相談内容

長く施設を利用していた方が、別の施設を利用することになった。今まで、本人が創作活動を続けられるよう環境を整備したり職員も気にしながら支援をしていた。今回、施設の種別も担当の職員も変わるため本人の創作の時間が確保できるか心配である。あわせて、遠方にある施設の利用となるため細かな引継ぎやフォローアップが難しくなる。

対応

日程調整を行い施設を訪問。担当職員とともに本人に面会し、意向を確認した。本人からは施設が変わっても創作活動を続けたいという希望があり、その後担当者と今後の対応について協議を行った。本人の意向に沿えるよう連携しできうる限り調整を行うということで意見が一致した。

今後について

次の受け入れ先である施設の担当者と、現担当者とともに面会し今後の方向性を確認する。可能であれば関係者を交えたカンファレンスにおいて、今後の支援方策に創作活動の支援を提案させてもらいたいと考えている。

また、距離的に新潟サテライトが新たな施設と近くなるため、サテライトを拠点にフォローアップをしたいと考えている。

相談事例２



絵を売ってほしいと言われましたが、どうしたら良いでしょうか？

相談者

福祉施設職員

相談内容

利用者の絵を展覧会で飾ってもらった後に、見た方から売ってほしいとの連絡がありました。施設として絵を販売した実績がなく、どのように対応して良いか分かりません。

対応

日程調整を行い施設を訪問。担当職員と面会し意向を確認しました。

背景を知る - 作者と作品を巡る状況

・作者は作り終えた作品に関して関心が無い。
・一つの作品をつくるのに１～２ヶ月かかる。
・作品が評価され、展示の機会が増えてきている。
・使用画材がサインペンのため日光が当たると色が脱色されていく。
・既に絵のレンタル貸し出しを行っている。
（※まちごと美術館→ 52 ページ）

アドバイス

制作するペースと作品点数を考慮すると、原画を販売するのではなく、複製したものを販売する方が良いのではないかとアドバイスを行いました。絵の複製をしている新潟市内の印刷会社に実際に絵を見てもらい、複製するとどのくらい原画と遜色があるのかを確認したところ、サインペンで描かれた絵の場合ほとんど差は出ないとのことを伝えました。また、現在既に絵のレンタル貸し出しに使用しているものについても、原画ではなく複製を貸し出していく方が良いとのアドバイスを行いました。

その後

今後、販売する絵については複製についても検討していきたいとの意向がありました。また、レンタル事業では実際に印刷会社に複製を依頼し、複製したものを貸し出しするようになりました。

相談事例３



私の作品を展示してほしい！

相談者

作者

相談内容

福祉施設にてさおり織りの作品を作っているので見に来て欲しい。

対応

事前に作品の写真を送ってもらった上で、日程調整を行い施設を訪問。担当職員とともに本人に面会し、意向を確認した。

背景を知る - 作者と作品を巡る状況

・作品自体の魅力が一般的には高いものではない
・作者としては作品を展覧会で出品し、多くの人に見てもらいたい。
・市が主催する市民参加型の展示イベントに自ら展示している。

アドバイス

NASC としては作品を評価する場ではないことをお伝えした上で、様々な展覧会の機会を紹介していく。展覧会それぞれの趣旨により、展示する作品の性質が異なるため、相談者の作品にあった展示の場を見つけて頂くようにお伝えした。また、NASC としても、いわゆる“良い”作品だけではない作品を扱えるような場を検討していく必要があると感じた。

相談事例４



作品に保険を掛ける？
～初めての試み～

相談者

福祉事業所　職員

相談内容

①法人内でアール・ブリュット展を開催してきているが、展示品に保険をかけたい。その保険について、どのようなものがあり、どのように掛けたらいいか教えて欲しい。
②作品借用にあたり、定型文があれば参考にしたい。

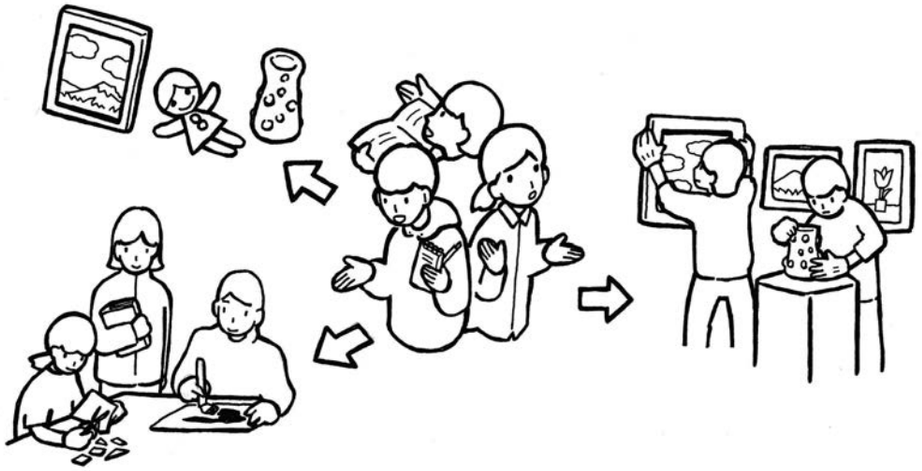
対応

①「動産保険」を使い作品に保険を掛けることができると返答。ただし、作品に評価額を付ける事、評価額の決め方の基準、保険適用になる事例についても情報を共有したかったので、それぞれをまとめた物をお渡しする。それに伴い、運搬中の保険についても業者を使用する場合と自ら取りに行く場合では保険の掛ける方法が違う事を説明した。
②作品借用にあたり、依頼文、借用許諾書の定型文を参考資料として提供。

今後について

障害者芸術作品の多くは、誰かのために創られたものではなく、画材が広告であったり、新聞の余白など日常にあふれているもので創作されていたりする。そういった日常から生まれる作品についての保険適用が難しい状況に直面している。今後、この状況が出来る限り無いようにすることが課題となり、この壁を乗り越えることで一層の理解を得ることが出来るのでないか。

相談事例５



学生の学びにつながる企画展を開催したい！！！

相談者

県内私立短期大学教員

相談内容

学校の創立記念事業及び新校舎の一般市民へのお披露目を兼ねて、複合的なイベントを開催したい。そのプログラムの一環として、アール・ブリュット展を開催したいと考えている。私自身、福祉学部の教員ではないがアール・ブリュットには非常に興味がある。それと同様にアートという身近な切り口で学生に福祉と接点を持ってほしいと考えている。

対応

ご相談をいただいた後に、展示会のコンセプトの確認や学校を訪問し展覧会の時期や展示場所、学生募集のスケジュールなどを確認した。

NASC からは、学生により福祉を身近にとらえてもらうために３回のワークショップを通じた参加型企画展を提案させてもらった。①アール・ブリュットの概要説明⇒②施設を訪問し創作の現場を体験⇒③学びを通じた作品のキャプション作成を経て、展示会を開催したい旨を提案した。

今後について

提案内容については、概ね了承をいただいた。新校舎が展示会場となるため、入館可能になったら再度訪問し会場の確認を行う。

ぬぐる
であう
そだてる

これからの“つくる”のために

新潟県内を巡る中で熱心にアート活動を支えている方に出会えた一方、福祉施設の中では少数派である場合が多いことがわかってきました。そこで、その一人一人が集い、お互いに話し合えるコミュニティをいかに作るかを課題として、セミナーやワークショップの場をつくりました。



であう

発掘・調査





身近にある作品を自慢する会

【下記セミナー内で開催】

◎アール・ブリュット
セミナー in 長岡
平成 28 年 8 月 19 日（金）

◎障がいとアートをつむぐ
つくるを支えるセミナー
平成 29 年 2 月 25 日（土）



「身近にある作品を自慢する会」は、絵画や陶芸などいわゆる作品というものから、日常での何気ない行為や拾い物など、これは作品?と思うものまで魅力を感じるものを持ち寄ってもらうワークショップです。自分の持ってきた作品について、主体的に話し手となってもらうことで、自分ごととしてアール・ブリュットを捉える機会となりました。



【発掘調査を行った市町村】
新潟市、長岡市、上越市、柏崎市、新発田市、
加茂市、燕市、糸魚川市、妙高市、佐渡市、
胎内市、弥彦村





データベース
60名

【訪問調査】

企画展開催に向けて、アーティストの発掘調査を行いました。県内30市町村中12の自治体を巡回し、福祉事業所や本人・家族の方にヒアリングを行いました。発掘調査を通じて、アーティストの発掘だけでなく、事業所との関係づくりやNASCに求める役割などを知ることができました。

特にこれまで全く創作活動の把握が進んでいなかった佐渡市においては、2回にわたり訪問調査を行いました。歴史的に西日本・北陸の文化と越後の文化が融合し独特の文化を形成していったと言われる佐渡島をほぼ一周し、多くのアーティストとの出会う機会となりました。

また、開催したセミナーの中でも、“身近にある作品を自慢する会”と題したワークショップを行い、参加者の皆さまに作品を持ってきてもらう形で作品の調査を進めて参りました。

その結果新潟県内で精力的に活動している作家についての情報、60名分をNASCのデーターベースとしてをまとめる事が出来ました。

発掘調査 in 佐渡





1/16



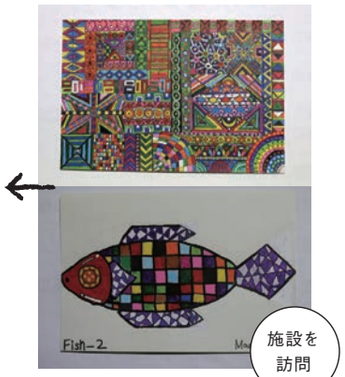
施設を訪問



作家の自宅へ訪問



1/17



施設を訪問



作家の自宅へ訪問



作家・嵯峨谷正敏氏の自宅訪問

2/1



行政や施設の方とのアール・ブリュットについての情報交換



作家にその場で似顔絵を描いてもらう



作家へのインタビュー・作品について質問



作家にその場でスケッチをみせてもらう

1/31



嵯峨谷正敏氏との再開
（インタビューは 56 ページ）

そだてる

人材育成

NASCでは、障害のある方の創作活動を支援している団体や、施設の職員、本人とその家族を対象に研修会を開催しました。今年度は、作品の魅力を知るワークショップや、展覧会などで作品を使用する場合の作者の権利保護などをテーマに研修会を実施しました。



アール・ブリュットセミナー in 長岡

8/19

日　時　平成 28 年 8 月 19 日（金）　13：00 ～ 17：30
場　所　新潟県長岡市：アオーレ長岡アリーナ会議室
参加者　47 名

内容

①セッション：
「アール・ブリュットの魅力 - 福祉施設が展覧会を行う理由 - 」
講師：片桐 公彦（新潟県アール・ブリュット・サポート・センター NASC センター長）
荒尾 和志（社会福祉法人　のぞみの家福祉会）

②実践報告：
「障がいのある作り手への支援 - ホイホイとムズムズと向き合う - 」
講師：角地 智史（新潟県アール・ブリュット・サポート・センター NASC アートディレクター）

③ワークショップ：
「身近にある作品を自慢する会」

先駆的に活動を行ってきた法人・団体の実践を学びました。後半は、参加者からあらかじめ持参してもらった気になる作品について、楽しみ方やディレクションの方法をお互い学び合いました。



【感想】
・とても熱心な実践報告、感動しました。
・今できることを今やることの大切さを改めて思うことが出来ました。
・表現の仕方は様々あると思いますが、その人なりの表現を認め、自分が認められているんだと実感できるよう支援していきたい。
・アール・ブリュットの成り立ちから海外・日本での取り組みについて詳しく聞くことが出来てよかったです。

障がいとアートをつむぐ

2/25

つくるを支えるセミナー

日　時　平成 29 年 2 月 25 日（土）13：30 ～ 17：30
場　所　あすとぴあ高田ミュゼ雪小町多目的室
参加者　36 名

内容

①講演：
「障がい者の造形活動を支える - アール・ブリュットというまなざし - 」
講師：小林 瑞恵（社会福祉法人 愛成会 常務理事）

②講演：
「初めての権利擁護、著作権や所有権って？」
講師：見竹 泰人（弁護士・森直樹法律事務所）

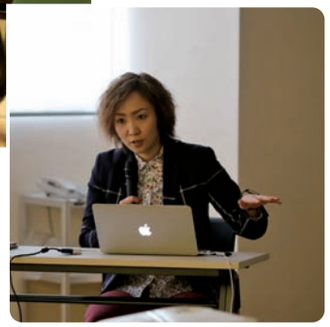
③ワークショップ：
「身近にある作品を自慢する会」
ファシリテーター：吉野 さくら

アール・ブリュットを学術的に学ぶ機会として、日本においてアール・ブリュットの普及啓発に尽力されている社会福祉法人愛成会の常務理事である小林さんからご講演をいただきました。世界そして日本のアール・ブリュットの歴史をしっかりとひも解いて、作者との関わり方やその中で見えてきた権利保護などの課題について解説をいただきました。

その後、11 月に引き続き弁護士の見竹さんから『著作権』『所有権』の基本的な知識を学び、最後に参加者から持ち寄ってもらった作品の魅力をフロア全体で共有しました。福祉関係者だけでなく、芸術関係者、本人・家族の参加も多くにぎやかな 1 日になりました。



小林 瑞恵氏（社会福祉法人 愛成会）による講演



障がいとアート つくるに関する 法律研修会

はじめての権利擁護

11/1

日　時　平成 28 年 11 月 1 日（火）13：30 ～ 17：30
場　所　新潟県新潟市：ハードオフエコスタジアム新潟会議室
参加者　16 名

内容

①講演：
「初めての権利擁護、著作権や所有権って？」
講師：見竹 泰人（弁護士・森直樹法律事務所）

②実践報告：
「現場の権利擁護 ～商品づくりや展覧会において～」
講師：岡部 兼芳（はじまりの美術館　館長）

③セッション：
「法律直談判！～日頃気になっていること、ざっくばらんに聞いてみよう～」
講師：片桐 公彦（新潟県アール・ブリュット・サポート・センター NASC センター長）
見竹 泰人（弁護士・森直樹法律事務所）
岡部 兼芳（はじまりの美術館　館長）
ファシリテーター：
角地 智史（新潟県アール・ブリュット・サポート・センター NASC アートディレクター）

NASC として初めての権利擁護に係る研修会でした。専門家である弁護士から『著作権』『所有権』の基本的理解を促してもらい、その後先駆的に事業を展開しているはじまりの美術館の事例をもとに、現場として作者の権利保護のために何をするべきか学びました。NASC の協力委員でもある弁護士の見竹さんが講師を務めた『初めての権利擁護、著作権や所有権って?』の講演内容の抜粋を下記のとおり示します。

【感想】
・これからこの視点をしっかり持って考え方をまとめていきたいと思います
・当施設でも実践できそうな事が多くて、ヒントがもらえて良かったです。
・アール・ブリュットの意味等を丁寧に説明していただき良くわかりました。著作権では障がいのある人の作品に関わる人として知っておかなければならない話でもっと勉強しなくてはならないと思いました。

著作権とは？



著作権は何かを作った瞬間に、その表現に発生する権利です。またアイデアには著作権は発生しません。アイデアを形にした人に著作権が発生します。

著作権を侵害するって？

どのような場合に著作権の侵害にあたるかは、判断が難しいです。これはアール・ブリュットに関わらず一般的に難しく、判断材料として言えるとすれば、常識的に判断することとその方にとって損得があるのかという点です。

著作権と所有権の違い

所有権とは、持ち主が使用・処分できる権利であり、売買・譲渡などで権利が発生します。物件に関わる権利で一番強い権利にあたります。

著作権とは著作物を自由に処分する権利であり、著作物とは思想・感情を創作的に表現したものです。留意する点は、個人の権利を守る一方で、一般の方にも使ってもらおうと文化の発展を目的につくられた権利であることです。他の方が使えないと文化の発展が期待できないため個人の権利を全て守る性質の法律ではありません。また権利は法律上、自分で使うことを想定しており誰かにやってもらう性質のものではありません。

長岡造形大学 施設見学のコーディネート

2/2

日　時　平成 29 年 2 月 2 日（木）10：00 ～ 11：45
場　所
①就労移行支援・就労継続支援 B 型事業所　青松ワークス
②生活介護事業所　いずみ福祉園
③地域活動支援センターⅡ型事業所　かりん

新潟県唯一の美術大学である長岡造形大学より、授業の一環として障害とアートの現場を学生に紹介してもらえないかとの依頼がありました。美術を勉強した学生が卒業して社会に出たとき、どのような職業がありえるのか？を現場を見て学ぶ内容であり、その一環として本センターのアートディレクターの仕事を紹介したいとのことでした。そこで新潟市にある社会福祉法人慈仁会にご協力頂き、視察研修の受入れが実現しました。福祉施設にとって美術系の大学から学生が見学に来るのは初めてであったことや、1 度に 40 名の学生が見学することから、打ち合わせを重ねて当日を迎えました。

当日はアートディレクターの角地智史より自身が携わってきた活動と NASC の概要を説明してもらった後に、実際に創作活動に励んでいるアーティストの方から自己紹介をいただきました。その後、3 グループに分かれ 3 つの施設を巡回し、実際に創作の現場を見てもらいました。現場では各施設の職員より、作者の日常についてや、作品をつくる過程についてなどを丁寧に説明して頂きました。学生にとっても、施設にとっても初めての機会となった今回ですが、いずれからも多く明るい感想を頂きました。障害とアートのこれからの担い手の為にも福祉、美術という分野を超えた交流の機会を今後も作っていきたいと思います。



角地 AD より NASC の概要説明



アーティストと施設職員の自己紹介



①就労移行支援・就労継続支援 B 型事業所
青松ワークス

創作現場を巡回



②生活介護事業所　いずみ福祉園



③地域活動支援センターⅡ型事業所　かりん

ひろめる

“何を魅力として、どのように紹介するか”

作品を発表する機会は障がいある作者や周りの家族、支援員にとっても日々の活力に繋がると共に、社会の人々が作品を通して緩やかに“障がい”と出会い、知る、考える機会となるなど、大きな意義があります。その一方で作品を発表する方法は作者ではなく、周りの人に委ねられています。“何を魅力とし、どのように展示するか”、NASCが関わった4つの展覧会をキュレーターそれぞれのコンセプトと共に紹介します。

4



アール・ブリュット展 in上越2
～この世界の愛し方 Everything is in this world～



コンセプト

この世界の愛し方
～ Everything is in this world ～

この世界にまだまだ未知なものはあり、人は独自にそれを見る力がある、という意味が込められています。

日々の中で、自分ではまず説明のつかない衝動に駆られたとき、人はこの世の何らかの本質と対峙しているのではないでしょうか。

その衝動のままに作り続ける彼らは、この世界の愛し方を知っています。

(本展アートディレクター井上多枝子)

日本のアール・ブリュットが集う

アール・ブリュット展in上越2の特徴は、日本を代表するアール・ブリュット作品を一堂に集めて紹介している点です。美術への興味関心の有無に関わらず、多くの人が作品それぞれに心を動かされ、障がいある人の果てしない創造力を知る機会となりました。昨年に続き2回目の開催となる本展では、前回を見て楽しみにして来たという声も数多く寄せられ、上越高田の地域での広がりを実感できる機会ともなりました。

また、日本のアール・ブリュットの黎明期から今日まで、全国各地でアール・ブリュットの展覧会に携わられた井上多枝子さんがディレクターを務めたこの展覧会には、障がい者のつくる作品も一般の美術作品と同様に丁寧に扱う姿勢や、作品と共に作者をキャプションや映像で伝える工夫などが詰まっており、ＮＡＳＣにとってこれからの大きな一つの指標となりました。







2	1
4 3	

1：展示作品（西川 智之）
2：展示作品（石野 敬祐）
3：展示風景
4：展示作品（戸来 貴規）

＜概要＞
日時　平成 28 年 7 月 23 日 - 8 月 14 日（10：00 - 18：00）
場所　あすとぴあ高田　５階「ミュゼ雪小町」（新潟県上越市本町５丁目４- 5）
主催　社会福祉法人 みんなでいきる
共催　上越市、上越市教育委員会
後援　NPO 法人くびき野 NPO サポーター
企画　NPO 法人はれたりくもったり、（公財）新潟県文化振興財団助成事業

関連イベント
・オープニング・セレモニー
・ギャラリー・トーク



【概念を突き崩すもの】

アール・ブリュット展 in 上越 2 の開催に合わせて、作品のできる過程を記録した映画を上映しました。参加者は 150 名を超え高田世界観は超満員。一同で、スクリーンに流される 10 の創作現場にくぎづけになりました。

上映会終了後に、実際に映画を撮った代島監督、アール・ブリュット展 in 上越 2 のディレクターをつとめてもらった井上アートディレクターを交え、それぞれが考えるアール・ブリュットについて語り合いました。

創作の現場でしか見れない世界、それを支える家族や施設職員の存在、そして作品をディレクションしていく中でどのようなかかわり方、言い換えるとどこまで踏み込んでいいのかといったように話題はつきませんでした。

一心不乱に衝動のままに芸術活動に打ち込む彼らの世界は、我々の概念を突き崩すもの凄い力がある。アール・ブリュットを通じて、完全に分かり合うことは難しいとしても 1 人ひとりの暮らしや人生を共感できるのではないか。そんなことを、ふと感じる 1 日になりました。

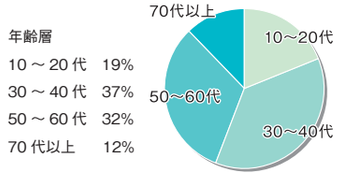


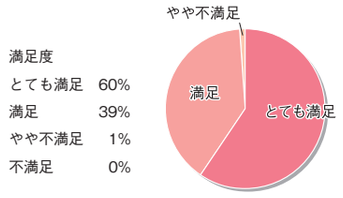




来場者数　2029 名

作家数 - 14 名





来場者の感想

・ほとばしる感覚と物凄い集中力に圧倒されました。ため息が全ての作品の前でもれました。

・紹介されるまでアール・ブリュットの存在を知りませんでした。もっと多くの人にアール・ブリュットが届くことを願っています。

・今年も楽しみにしていました。人間の根源のようなものが揺さぶられる感覚、「怖い」というものに近いような感覚でした。

ARTBRUT at SHIBATA
～モノ、ガタル、タネ～







コンセプト

人にはそれぞれ価値観がある
育ってきた地域、環境、出会った人々…
少なからず影響を受けながら
ひとりひとりの価値感がうまれてくる
どことなく、他人（人）の価値観に頼ってしまう私…
ここにある作品と作者の物語がつながった時
他人（ひと）の価値観に頼らない様に
尊さと力強さを覚える
脱ぎ捨てよう私の枠（フレーム）を
歩み寄ろう、あなたの価値へ…
力強いメッセージのタネが、新たな花々を咲かせてくれる

福祉施設が展覧会をすること

新発田アール・ブリュットの特徴は、施設の職員さんたちが自ら主体となって展覧会を企画、運営しているところです。自分たちの施設の利用者の作品はもちろん、新潟県内の福祉施設を周り、作品を集めてきます。作品集めると同時に、作者のことについても丁寧に聞き取りをして、キャプションやギャラリートークを通して紹介しています。

展示の中には家の襖をそのまま借りてくることもあり、親御さんとの日頃からの関係があるからこそできる展示だと思います。作品をどのように見せるかについても、職員さん同士で話し合って決めています。搬入日には職員さんが作品を前に、この角度で見せた方がいい、いやこの角度がいい、と議論になることもあります。

そのように作られた展覧会は、いわゆる美術館の展覧会とは異なり、ある種の大胆さや、突拍子のなさがある展示になったりするのですが、それこそが面白みであり、オリジナリティと言えるのではないかと思います。

3	2	1

1：襖に描かれた平面作品
2：会場となった寺内部の展示風景
3：庭に設置された立体作品

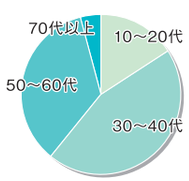
概要

日時　平成 28 年 10 月 1 日 - 5 日（10：00 - 17：00）
場所　新発田市長徳寺（新潟県新発田市大栄町２ - ７ - 22）
主催　社会福祉法人　のぞみの家福祉会 のぞみ工房
共催　敬和学園大学、新潟県アール・ブリュット・サポート・センター NASC
後援　新発田市、新発田市教育委員会、新潟日報、FM しばた

来場者数　273 名　　作家数 - 20 名

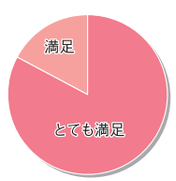
年齢層

10 ～ 20 代	16%
30 ～ 40 代	45%
50 ～ 60 代	35%
70 代以上	4%



満足度

とても満足	83%
満足	17%
やや不満足	0%
不満足	0%



日々是好日

HIBIKORE
KOJITSU

暮らしから
生まれるもの









1：展示風景
2：展示風景（入口付近）
3：会場までの案内サイン
4：会場のアオーレ長岡

アール・ブリュット展 in 長岡

コンセプト

障がいのある人が作り出すものがある。
素朴な色、大胆な線、繊細な形、圧倒的な量。
私たちはそんなものを前に、なんとも言えない気持ちになる。
自分とは全く異なる感性に、どこか遠い気分になったりする。
けれど、それは作る人の日々の中では当たり前に作られたりしている。
そんな作る人の暮らしぶりを知ると、少しそのものが変わって見える。
新潟にもあちこちに作る人がいて、案外自分のすぐ近くで、ものが生まれている。
素朴な色、大胆な線、繊細な形、圧倒的な量と共に、ひとつかみの暮らしを紹介する。

（本展アートディレクター　角地智史）

《ねらい》

障がいのある人の創作を支える、施設職員さんやご家族に対してのねらいとして、改めて自分たちの創作支援を見つめるきっかけになるような機会にしたいということがありました。そこで、これまでは周りの人があまり魅力を感じていなかったり、日々の中で当たり前になっていたりする、小さなものごとをどのように捉えるか、ということをひとつのテーマとして展覧会を企画しました。

概要

日　　時	平成 28 年 11 月 19 日（13：00 - 19：00）20 日（9：00 - 16：00）
場　　所	アオーレ長岡 市民交流ホール B.C（長岡市大手通 1 丁目 4 番地 10）
主　　催	新潟県アール・ブリュット・ネットワーク
	新潟県アール・ブリュット・サポート・センター NASC
共　　催	長岡市 / なうネット長岡
後　　援	長岡市教育委員会
総合演出	角地智史
空間演出	小出真吾
イベント	11 月 19 日　（14：00 - 14：30）
	ギャラリートーク　角地智史（本展アートディレクター）

《とりくみ》

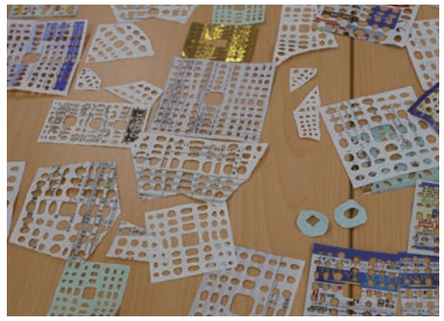
展覧会を行う3ヶ月前にアール・ブリュットに関するセミナーを開催しました。そこでは基本的なアール・ブリュットに関する講演と共に、「身近にある作品を自慢する会」と題し、参加者に作品を持ち寄ってもらうワークショップを実施しました。自分の持ってきた作品について、主体的に話し手となってもらうことで、自分ごととしてアール・ブリュットを捉える機会となりました。また、持ちよってもらったことで、私たちも数々の作品と出会う機会ともなりました。

その中で出会ったものの一つに、紙を切り抜いたものがありました。1枚のもの自体に目を惹かれる訳ではありませんでしたが、職員さんにその背景を聞くと自宅で切り抜いたものを、施設に来所する際に職員に渡しているということでした。ただ、施設としては紙が溜まる一方だったので困っているとのことでした。一方で“つくったものをあげる”身近な人へのコミュニケーションの手段として、創作をしていることに魅力を感じました。そこで、展覧会では同じようにつくったものを職員にあげている作者と対に並べ、その背景を紹介しました。

《成果》

展示することで、職員さんがものを見直す機会となりました。また、小さなものごとを背景に焦点を当てて展示することで、展示を見た他の施設の職員さんが自分の施設にもあるものにも目を向ける機会となりました。







上：持ち寄った作品の魅力をグループに別れて発表し合う
中：持ち込まれた作品
下：持ち込まれた作品

コラム

本展空間演出
デザイナー　小出 真吾

見たくなる台をつくる

今回の展覧会では「作品の魅力をどう引き出すか」を常に考えてきました。日々の暮らしのなかで生まれた、とても魅力的だけど今まで作品として扱われにくかったものたち。その魅力をどのように伝えるか、作品たちと向き合いながら空間を構成していきました。

展示台は基本となる構造は同じですが、作品に応じて天板の形や高さ、素材や色などがすべて異なります。繰り返し作り続けられた作品の圧倒的な数や、その作品たちの日々の変化や違い、その魅力は様々です。無数の穴が空いたシルエットを強調するために透明な天板を使い床に影を落としたり、色々な紙やチラシが使われているのをわかるよう裏面が見えるように鏡を利用したりと、それぞれの展示台に仕掛けを施しました。

また今回の展覧会は、主催者側も作品展示の経験が少なく、そういった方達と一緒に自分たちで設営ができるような展示台にしています。展示台はいくつかのパーツに分解でき、今後の作品展示でも使用できるようにしています。作品の魅力だけでなく、その魅力を『色々な人たちに伝えていく魅力』も主催者の方達に感じてもらえたら嬉しいです。



おもちゃのテーブルをイメージした展示台



スクラップブックを敷き詰めた展示台



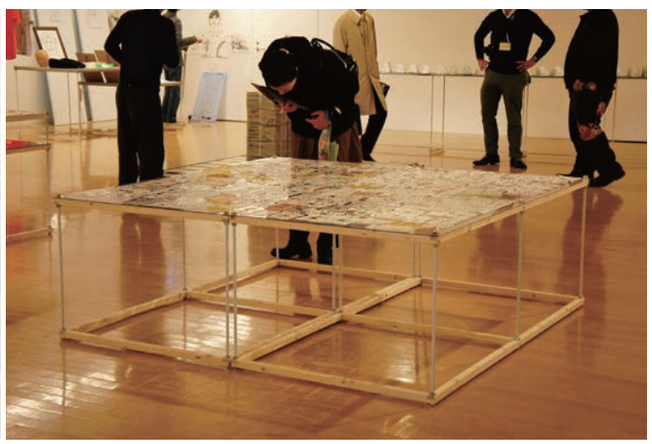
70 台の車の作品が一列に並ぶ細長い展示台





上の段がアクリル板、下の段が鏡になっていて作品の裏面もみることができる。





アクリル板の上に並べられた無数の穴が開けられた作品。スポットライトが当てられ、床に影がおちる。



長岡市長も来場し、意見交換を行った。



作家本人や関係者も訪れ、交流をはかった。



沢山の来場者で賑わう展示会場。



ギャラリートークで作品解説を行った。

コラム

特定非営利活動法人はれたりくもったり
アートディレクター　井上多枝子

7月に上越市で「社会福祉法人みんなでいきる」の皆様と展覧会を実現したとき、展覧会開催へのひとつひとつを学ぼうとされるそのひたむきさから、今後の取り組みへの期待を膨らませていました。その後、県内、佐渡島の作品調査に同行させていただき、多大な可能性を見ました。近所や知り合いの方々、時々訪ねてくる福祉相談員しか知らない、非常に個人的な表現活動。自分や他人に褒められるためでもなく、ただただ淡々と日々、続けている表現。それがなんであるかなど、やはり簡単に言葉に言いくるめられないと実感しました。

11月の長岡市での展覧会ではそれぞれの表現を見つめたからこその展示が繰り広げられていました。展覧会のタイトル「日々是好日　暮らしから生まれるもの」は、まさしく新潟県で見た作家たちを指すものです。彼ら自身を塗り替えるのではなく、ただ寄り添っていることに改めて私たちの活動の意味深さを感じました。

NASCは展覧会を開催するだけでなく、作家たちを人と繋いだり、相談を受けたり、集まって考えたりという様々な活動を軸にしています。展覧会を開催することが作家それぞれにとってどのような影響をもたらすのか、また社会がどのように変わっていくのかをゆっくり検証していってほしいと思います。様々なこれからの事例にひたむきに向き合うこと。作家の表現する日々を変えるのではなく、そこにただ寄り添うだけ。それこそが表現の可能性を探り、その魅力と立ち会える方法だと思っています。

コラム

社会福祉法人中越福祉会
障がい者就業・生活支援センターこしじ　足立裕介

アール・ブリュットが描く線、繋がる心

法律や制度、芸術作品や地域交流など何かが生まれるとき、変化をもたらすときにはその出発地点に「暮らし」があると考えています。

アール・ブリュット展in長岡で特にこの事を感じました。彼らの日々の暮らしから産まれてくる形（作品）は、観た人の心を動かし、より深く「共に暮らしている」という実感を与えたのではないかと思います。長岡展に携わった当法人スタッフは、芸術に全く縁のない者ばかりでした。作品の見方、資材の使い方、何から何まで全てが一からのスタートでしたが、片桐センター長や角地ディレクターの牽引、長岡市を始めとする様々な関係機関との協力により、成功へ向かって進むことができました。

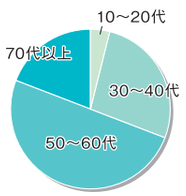
この長岡展が終わった後、多くの変化がありました。第一に作家の変化。初めて作品を提供し、展示される。彼にとって人に観られるという感覚は、次の創作衝動を駆り立てたのか、長岡展の数日後に新たな、それも全く趣向の違う作品を職員に渡していました。いつものように無言で、話しかけるわけでもなく、しかしその新作は彼からの何かしらのメッセージとも考えられます。

次に、携わったスタッフの変化。前述の作家の新作は、一本の人毛を寸分狂わず均等に何度も結んであるものでした。これを渡された職員は、これまでであれば「なんだこれは」とゴミ箱へ捨ててしまっていたかもしれません。しかし、この時の職員の反応は「なんだこれは」と思うものの、ワクワク感に溢れていたようです。彼らが作るアートを知りたい、他の誰かに観てもらいたい、知ってもらいたい、こんな感情が生まれるようになったことは大きな変化であり、長岡展の成果と感じております。

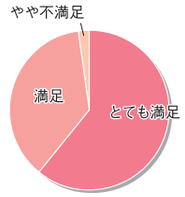
また、学校の先生からは、「彼らの表現を発表する場があり非常に感動した。」ご家族からも、「我が子の良さを改めて感じることができた」という喜びの声が多くあがっています。これらの喜びが1人でも多くの方と分かち合えるよう、日本の、新潟の、長岡のアール・ブリュットが今以上に盛り上がっていくことを期待しております。

来場者数　840名
作家数 - 20名

年齢層	
10～20代	4%
30～40代	27%
50～60代	50%
70代以上	19%



満足度	
とても満足	61%
満足	37%
やや不満足	2%
不満足	0%



来場者感想

- 知的障がいの娘と来ました。ハサミで細かく切った折り紙で貼り絵をするのが大好きです。この出会いに感謝です。ありがとうございました。
- 全く美術・芸術に興味のなかった私の様なものが１時間半も会場にいました。心打たれる作品ばかりでした。素敵なものをみせていただき、ありがとうございました。
- 作品だけでなく作者の日常、生い立ち、作品が完成するまでの経緯がつづられていたことが良かったです。
- 物に対する愛情にあふれた作品ばかりでした。自分が大人になるにつれて目に入らなくなっていた身近な大切なものがこんなにもあるんだなと思いました。

障がい・アート・ミーティング
彼の描くセーラームーンの面白みは伝わるか

展覧会の次の形について一緒に話し合いながらつくる

「すでに展覧会で評価されている人の隣の席で、その人と同じような熱量でセーラームーンを描いている人がいるのだけど、なんとか展示できないものでしょうか」ある職員さんからそんな相談がありました。また、調査を進める中で誰が見ても面白いと思えるものにも出会うのですが、そうではない作品にも多数出会います。そのようなものごとを、どう捉えるかということが一つの課題として見えてきました。障がい・アート・ミーティングでは、福祉施設や家族、市民の方と共に、この課題を一緒に考え、新しい展覧会の形を模索しました。

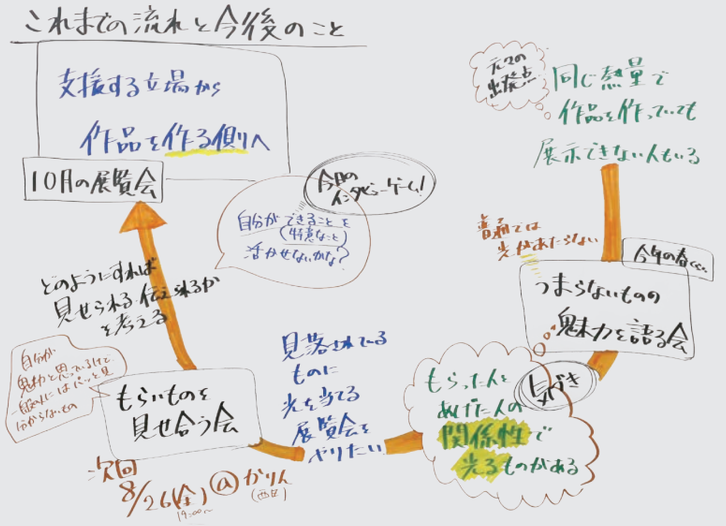
また、展覧会を一緒につくることを目的に、創作を支える人同士が集い話し合うことで、それぞれの関係性を深めるという目的がありました。その為、会場は主に参加者の福祉施設としました。ワークショップの休憩時間には施設でつくられたお菓子を提供してもらうと共に、施設紹介、自慢を行ってもらいました。家族や職員さんにとって、自分の関わりのある施設以外を知る機会ともなりました。

企画／角地智史
ファシリテーター／吉野さくら・掛川洋規
参加者／福祉施設職員6名　家族4名　一般市民4名









2	1
3	

1：会期中賑わう会場
2：ワークショップに持ち寄られた作品
3：ワークショップに持ち寄られた作品

障がい・アート・ミーティング プログラム

1回 今の私と実は

8月5日
19:00 - 21:00
場所 :NPO 法人 スペース Be

ねらい

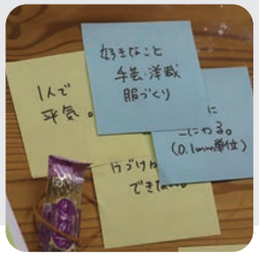
○お互いにどんな人かを知り合う。
○自分の得意なことを確認する。

インタビューワーク

①2人ペアになり話し手と聞き手に分かれる。
②“今の自分と「実は」な一面”とのテーマにそれぞれが相手のことを聞いていく。
③聞いたのち、“実は○○な○○さん”とのタイトルの元に相手のことを記述する。
④その際「私は○○（相手の名前）です。」と、相手に成り代わった文体で記述する。

ひとくふう

・何を質問しても良い。話したくないことは話さなくて良い。
・油性ペンで一発書きする。下書きはしない。
・履歴書にしない。文章にすること。



2016.8.5.
小林美果

実はアートに興味がなかった近字せん。

私は近字です。今は整体の仕事をしていますが、昔は営業職をしていました。そのためいくらでも質問し続けられるし、しゃべり続けられます。子どもが2人いて、障がいを持っています。上の子どもが中学生の時に書いた「笑う」の字が先生に褒められて、三越に展示されました。それが嬉しくて、子どもが書く字に目を向けはじめました。それまでは、その魅力に気付いていませんでした。このことが、今アートキャンプをやっているきっかけでもあります。アートキャンプの他に、知的障がいを持つ人達が集まった劇団もやっています。

2回 つまらない作品についての魅力を話す会

8月26日 19:00 - 21:30
場所：(社福) 更生慈仁会 かりん

ねらい

自分にとっての“良い”を見つける。

参加者への事前課題

質問シートへの記入
・つまらない作品の魅力
例：一見○○だが○○、作者にとって○○、私にとって○○
・つまらないと思われている理由
例：○○な環境のため、○○を知らないため、○○な作品のため

つまらない作品についての魅力を話す

①グループ内に分かれ「つまらない作品」を紹介し合う。
②事前課題として書いてきている質問シートの内容を基に話し、グループ内の他の人たちからの質問で更に深めていく。
③そのときに出てきた言葉はそれぞれのテーブルで模造紙にメモする。

企画者感想

ミーティングの形として、言葉だけで話を進めていくと、言葉のニュアンスの受け取り方の違いなどから場が滞る。一度言葉から離れて作品を前に話をする方が場が進むことがあると分かった。

「つまらない」が争点になっていて、意図と違うことと言われていましたが、つまらなくていいじゃないか！と言いたいです。だって実際つまらないから。

「でも」に続く言葉が大事だから、あえての「つまらない」ですよね。キャッチーなので残してほしいです。

3回 作品の背景の伝え方を考える会

9月9日
19:00 - 21:30
場所：中地区公民館

ねらい

作品の背景にある魅力をどのようにすれば伝えられるのか、その工夫を考える。

参加者への課題

今回展示してみたい作品を持ってくる。その作品の魅力を言葉にする。

作品の魅力の伝え方を考えるワーク

それぞれの持ってきた作品の魅力を自分自身のキーワードとつなげて、伝える方法を考える。
①1回目のワークショップのときに作成した自己紹介シートも参考に、自分自身のキーワードを付箋に書き出す。
②作品×自分のキーワードで伝え方を個人で考え、付箋に書く。
③出てきたアイデアの中から、10月の展示で実際に活かすものを絞り、決定する。





4回 実際の展示を考える会

9月30日
19:00 - 21:00
場所：医学町ビル

ねらい

展示会場を見ながら展示プランを立て、見せ方における工夫を考える。

ワーク

実際の会場で伝え方を考える。
①前回のワークと同様に、自分の強みと作品の魅力を掛け合わせて、伝え方のアイデアを出す。
②自由にワークを進めてもらう。基本的に個人ワークであるが、近くの人と話しながら考えても良い。
③会場で使える什器を選択するとともに、自分がどの場所で展示を行いたいかを決定する。

参加者感想

互いに良い影響を受け合う良いミーティングになりました。なんの展示もしない自分が関われることを嬉しく思います。当事者でなくとも関心を持つ人が入り込める隙のある集まりであると、良いと思いました。

5回 作品を展示する

ねらい

展示を実際に形にしていく。

ワーク

2日間ある搬入期間の内、参加者は都合の良い日にプランに従いを展示行う。主催者は全体の会場が作られていくのを確認しながら、全体のバランスを微調整していく。

10月20,21日
19:00 - 21:00
場所：医学町ビル





作品展示風景







障がい・アート・ミーティング

彼の描くセーラームーンの面白みは伝わるか

6回 当日

コンセプト



障がいのある人が作り出すものがある。
素朴な色、繊細な形、圧倒的な量。
それらは一目で僕たちを惹きつける。
一方で上手に描かれたセーラームーンがある。
僕にとってはなんてことのない絵だけど、
施設職員さんがもらったものなんです、
と言って大切にしている。
その人だから知っている魅力がある。
その魅力を知りたいなと思う。

（本展アートディレクター　角地智史）

来場者数 103名

概要

日時　平成28年10月22，23日(10:00-20:00/ 10:00-16:00)
場所　医学町ビル201（新潟県新潟市中央区医学町通1番町41）
企画　角地智史
主催　アートキャンプ新潟
共催　新潟県アール・ブリュット・サポート・センターNASC
　　水と土の文化創造都市・市民プロジェクト2016

展覧会後の感想

参加者感想

・ミーティングを何回もする展覧会は初めて、あのミーティングがあったから頑張れた。「どんなもんだい！」な作品展じゃない。
・障がいの有無ではなく、物語として成立している作品ばかり。
・作者本人が来てくださったことが良かった。一緒に絵を描いた。言葉ではないミーティング。

企画者感想

・障がいある作者に最も近い人が、作品セレクトから展示までを行うことで、周りの人の作者への思いの熱量がそのまま展示に現れていた。展示から関係性を感じることができた。



上：展示風景
左：ワークショップの様子
中：作家によるライブペイント
右：ワークショップの様子







アートキャンプ新潟とは、新潟に暮らす障がいがある人々の創造活動を豊かにするために活動する団体です。障がいがある人々の創りだすアート作品には、時折ハッ！とするぐらいパワーをもつものがあります。この新潟の地にも、そのようにハッ！とするようなアート作品がたくさんあります。そんなアート作品たちをもっと多くの方々に知ってもらいたい。そして、そのアート作品を生み出す人々にとって創作活動がこれからを生きる術となったらいい。

そんな思いを込めて「アートキャンプ新潟」は様々な活動を行っています。

アートキャンプ新潟

＜概要＞

日時　平成29年3月11日 - 13日
（10：00 - 18：00）
場所　新潟市 東区プラザ
新潟県新潟市東区下木戸1丁目4 - 1
主催　アートキャンプ新潟実行委員会
後援　新潟市、新潟市東区社会福祉協議会
助成　県民たすけあい基金

関連イベント
・ワークショップ
堀川久子（踊り）＋古田木綿子（音楽）
うーぱーるーぱー工作室、田中勝彦
・イベント「ナイトミーティング」



上：飲食店での展示
右：スーパー銭湯での展示
中：老舗寿司店での展示
左：新潟駅でのフラッグの展示







《ねらい》

障がいのある人の作品レンタルを通して、障がいのある人と社会、人と人との関係を結び、コトコトと深めていこうとする取り組み。レンタル料は1作品につき1ヶ月3000円、1年契約となっている。そのレンタル料の一部は作家に支払われる。

現在では（平成28年2月24日現在）、17ヶ所20作品が常設で展示されているほか、新潟駅の構内にて“エキゴト美術館”と題した、作品のフラッグ展示も行われ、障がいのある人の作品が日常の中で目に触れる機会となっている。昨年の9月から11月にかけては、新潟県内のモスバーガー全21店舗で各2作品を展示する“モスごと美術館”も行われるなど、大きな反響を呼んでいる。

まちごと美術食堂
Cot coto

その後と

あらためて話を聞きにいこう

作品を発表したことでその後、どのような変化があったのか。作者、支援員、家族に改めて会いに行き話を伺いました。

聞き手　角地智史

【プロフィール】
写真家／NASCアートディレクター
アートキャンプ新潟 理事

2013年より障害者の創作活動を豊かにする市民団体“アートキャンプ新潟”として、様々な展示やセミナー等を企画。2016年よりNASCアートディレクター。作品調査から、展覧会“日々是好日”や“障がい・アート・ミーティング”の総合演出を行った。



描き続けること、すなわち人生也　―暮らしの中の一場面―　嵯峨谷正敏

＜ Interviewee ＞
嵯峨谷正敏

＜ Interviewer ＞
角地智史（新潟県アール・ブリュット・サポート・センター アートディレクター）
本間奈美（障がい者相談支援事業所こもれび相談支援専門員）

photo by　衣笠名津美



1回目の調査時に出会った嵯峨谷正敏さん。この出会いがきっかけで、長岡市で開催したアール・ブリュット展in長岡（平成28年11月19～20日）に作品を展示させてもらいました（チラシの表紙にも作品を使わせていただきました）。毎日のように佐渡の身近な風景を描き続ける嵯峨谷さん。展示後の反響を含めた嵯峨谷さんの近況、そして今後の展望をインタビューさせてもらいました。

さ：嵯峨谷正敏
角：角地智史
本：本間相談支援専門員

【再会】

角　嵯峨谷さん、今日は長岡展の報告に来ました。本当にありがとうございました。

さ　盛況だったと聞いとる。あれだけの展示会、陳列するのんが大変だわ。まあ、ケーキ用意しとるし食えっちゃ。

角　絵を展示してみて、その後どうですか？

さ　嬉しかった。新聞にも載ったから、友達からも見たぞ見たぞと連絡もろた。

本　父ちゃん、家に展示しとった絵、どこいったの？

さ　納屋にある。みんな、納屋にもっていった。

本　個展、開いてみてどんな感じ？

さ　近所の人が見に来てくれる。若い子も来とる。お世話になった病院なんかにもはがきで案内出した。



【納屋の展覧会】

―個展の開かれている納屋の2階に移動

さ　個展開くために額、買ったっちゃ。

本　大変だったね。

さ　1つ3600円もしたっちゃ。2階に運ぶのんも大変での。

角　ちゃんと観賞用にソファとみかんまで用意してますね。

さ　お茶も熱いんだ。飲んでくれ。

角　お茶も熱いんですか（笑）。毎日淹れているんですね。

本　父ちゃん、おもてなしだね。

さ　若い子も喜んでくれとる。

本　こっちの椅子に父ちゃんが座って、説明すんだな。

さ　うん。

角　それをちょっと体験してもいいですか。

さ　いいよ。

角　じゃあ、解説してもらってもいいですか。まず、いつから展示しているんですか。

さ　11月の25日だな。うん。

角　前にも、こうやって納屋に絵を展示したことはあったんですか。



さ　はじめて。

角　どうして今回展示しようと思ったんですか。

さ　1階でやろうと思ったけどの、1階は倅が車をいれるし、せもうなるからの。俺、本当は2階に上がったり、下りたりするのんいやもんだし。下でやろうと思った。けも、2階でこうやっとればいつまでも置けるだろ。邪魔にならんし。うん。若い女の子が、この絵を見ての、私こんくらいの絵を描けたら人生変わったって。

角　若い方も観に来るんですね。案内は色んなところに出したんですか。

さ　友達からの、集落の人も、みんな出した。70～80枚は出したかの。俺の、本当は看板を出そうと思った。国道の入り口に。そらけも、電柱に引っ掛けるのも、道路標識に引っ掛けるのも気が引けるしの（笑）。

角　みなさん、どういった感想を持ちましたか？

さ　市役所のもんも3人来てくれた。みんな褒めてくれた。説明するとの、なるほどなるほどとみんなわかるっちゃ。

角　なるほど。

さ　やっぱり細いラインは、修正液を使う。それからマジック。うん、マジック。マジック、修正液がないと描けん。うん、筆じゃあの、細い線は、マジックや修正液で。そういったマジックのような極細の線は描けん。

角　方法は誰かから教わったんですか？

さ　一番最初はの、鉛筆で描くのんや。鉛筆で描いたあと、マジックの細いやつで描くわけ。そうして今度は、鉛筆の線を消して塗るのん。鉛筆は6B。4Bを使ったっとったけも、6Bの方がやっこくて力がいらん。色が濃いな。

【絵は手元に残さない】

角　マジックを使いだしたのはいつ頃からですか？

さ　5～6年前ぐらいからかの。

角　この絵の中で、特にお気に入りはありますか？

さ　やっぱり風景が良いと力が入る。同じ風景を5～6枚描くこともある。友達にくれたり、兄弟にくれたりの。

角　絵を描いたら、あげるんでしたっけ？

さ　うん、あげる。俺、今、持っとるのんちゅうたら、これだけ。

角　今、持っているはこれだけですか？

さ　うん。みんなくれた。病院の院長先生にもくれるしな。

角　いいなぁ。僕もほしいです（笑）。長岡で展示した時よりも、何枚か絵が増えていますか？

さ　うん。水彩ちゅうもんはの、色を重ねられん。1回しか塗らんから色が瑞々しい。2回塗った絵は、やっぱり絵が汚のうなるな。けも2回塗らんなんときもある。水彩もなかなか面倒だけど、似顔絵も面倒だ。

角　似顔絵は女優の方ですか？

さ　うん。女優と歌手。

角　写真を見て書くのですか？



さ　うん。本があるわけや。だもんだからそれ見て書くんだ。

本　父ちゃん、最近だよね。似顔絵書き出したのは。

さ　うん、最近だ。

角　最近も絵は描かれているのですか？

さ　いや、今は個展やっとるもんだし休んどる（笑）。

角　冬も外に出て書かれるんですか？

さ　冬景色も書くよ。やっぱしの、同じ風景を描いても後から描いた作品の方がようなる。

【次の展覧会に向けて】

角　今後も個展を開く予定はありますか？

さ　やる。全部新しい絵にして開く。絵は、残しておいてもしょうがね。友達にみんなくれる。病院の先生にも弟にもくれる。描いた絵は、みんなもっとらせんちゃ。手元に置いておくとの、絵はうまくならん。

本　とっておけばいいのに、父ちゃんくれてしまうもんね。

さ　俺は、人のために頑張るっちゃ。

角　今まで、凄く頑張ったと思えたことはなんですか？

さ　俺は、郵便局を退職してから、土木作業員をやっとった。本当に一生懸命頑張って表彰も受けた。雨が降（ふ）っても雪が降っても、15年間Tシャツ1枚で働いとった。女房にもかっぱ着ろと言われたけも、着んかった。

角　15年間、年中Tシャツ1枚ですか（笑）。

さ　アニマル嵯峨谷って言われとった（笑）。まあ、ケーキ食えっちゃ。みんな同じ300円だっちゃ（笑）。

一同　いただきます。

本　でも、父ちゃん、去年具合悪くなったでしょ。



さ　そん時はもうダメかと思った。元気になって良かったよ。本当に。

本　本当だの。世話になったっちゃ。病院行けって言うても行かんもんだし。

さ　病院はいやっちゃ。辛気臭ぇ。ここで一句。『一秒で　明るく生きる　術を知り』。

一同　いいねぇ。

さ　けもの、みんな地位や名誉もあるかもしれんけど、本当の幸せは俺にはかなわん。俺には地位も名誉もねーけど、幸せだ。カラオケ、やらんかっちゃ。

ディレクターとアーティストの間にあるもの　石栗仁之

＜ Interviewee ＞
石栗仁之

＜ Interviewer ＞
角地智史（新潟県アール・ブリュット・サポート・センター アートディレクター）
竹石早紀（社会福祉法人いぶきサポート協会きぼう福祉園）

photo by　衣笠名津美



平成28年度の新潟県障害者芸術文化祭絵画部門で県知事賞を受賞した石栗さん（作品名：僕達の世界の銀河系）。平成27年度に惜しくも県知事賞を逃した悔しさをバネに今年度は見事受賞を果たしました。日本最大級の福祉の祭典アメニティフォーラム21と同時開催であるライフワークイズムのチラシの表紙にも作品が使われ、今、石栗さんの描く作品に注目が集まっています。

角地アートディレクターと石栗さんは旧知の仲。しかし、思い出話を語る中で今まで気づかなかったことがちらほらと。迷路のようで絵画、絵画のようで迷路。まるで二人の関係性のようです。

石：石栗仁之
竹：竹石早紀
角：角地智史

【作品を展示することについて】

角　えーと、何から話しましょうか（笑）。石栗さんとは結構展覧会を通じて何度もお会いしているんですけど、いつからの付き合いでしたっけ？

石　えーと、えーと、絵を展示したら凄くみんながびっくりして、その展示会のだいたい1カ月後ですね。

竹　この施設ができてからだよね。だいたい3年前ぐらい？

石　で、1、2、3・・・6回ぐらい来た。

角　僕、6回ぐらい施設に来たんですか。（たしか十数回行った気が・・・）

石　数えてた。

角　誰と一緒に来たか覚えていますか？

石　最初？最初は覚えてないね。

竹　最初は角地さん、一人だけだった気がする。

角　この展示、覚えてますか？

石　あー、こんな感じなんだ。東区プラザですよね。

角　これが一番最初に石栗さんの作品を展示した時だったと思うんですよね。この時のこと覚えてますか？

石　覚えてる、覚えてる。

角　2014年の冬かな。一番最初に展示した時に何を思いましたか？

石　えーと、自分の展示が飾られていると思うと緊張しちゃって、作品の前で立ち止まれなかった。あと、みんなに凄いねと言われたのに驚いた。自分にとっては普通のことだからね。

角　展示会に行って、自分の前で立ち止まれなかったんですね。

石　立ち止まれなかったというか、遠くから見てた。

角　結構、東区プラザは近いですよね。1人で観に行ったんですか？

石　行きました。

角　平日、休日？

石　休日に行きました。一ヶ月ぐらいやってたよね。

角　そうそう。じゃあ休日に自分の作品をよけながら観に行ってたんですね。

石　そう。

竹　平日に一緒に観に行ったこともあったよね。

石　行った、行った。

竹　声をかけてくれた人もいたんですよ。

石　その人と、ずっと話をしてた。

角　どんな話をしたんですか？

石　おばちゃんが、これを描いた作者ですかと驚いていて。凄いと。30分ぐらい立ち話をしましたね。自分は聞き流していたんですけど（笑）。

竹　凄いねといっぱい言ってくださって。凄い雪の日だったよね。なんか思い出してきました。施設の広報に載せようと見に行ったんで

竹　迷路が好きだって方が結構いて、どうやったらゴールできるかねという話はしてますね。近づくと迷路だし、離れると風景。どっちでも楽しめるのが石栗さんの絵。

角　前は、絵を描く前に設計図を作っていましたよね。

石　面倒くさくなって（笑）。

【念願の県知事賞受賞】

竹　お母さんも、お姉ちゃんも石栗さんの絵が展示されたことに喜んじゃって。

石　ホンマにって。ただよく考えたら、県展の絵は暗いよね。空っていうか宇宙なのに。

角　県展で県知事賞とってどうでした？

石　びっくりした。だって1500点ぐらい応募があったんでしょ。頑張ったけどね。

角　県知事賞を取りたいという思いが強かったのは知らなかった。今度、滋賀県で開かれる展覧会でも表紙に絵が使われるじゃないですか。どんな気持ちですか？

石　頭が365度回った。

角　頭が365度回った？

竹　その話をいただいた時に、石栗さんには説明したんですけどなんとなくピンときていないといいますか。遠いところとか、琵琶湖があるところというのは分かっているみたいなんですけど。いまいち、どのくらい凄い事なのかがイメージがついていないみたいで。

石　滋賀って、滋賀ですよ。

竹　ポスターの現物が届いてようやく目が覚めた感じです。

石　まさかのまさか。改めて観ると、思ったよりも色が薄かったなと思いました。

角　自分の絵がポスターになる気持ちはどんな感じですか。

石　えーと、まさかね。現実じゃない感じ。寝てないのに現実じゃない感じ。妄想なのかな。

角　滋賀県にも行くんですか？

石　ちょっと分からないですね。行くような話は聞いているけど、遠いし本当に行けるんだろうか。

角　展覧会で依頼が多くなってきましたけど、どんな気持ちですか？去年だけでもいくつも展示しましたよね。

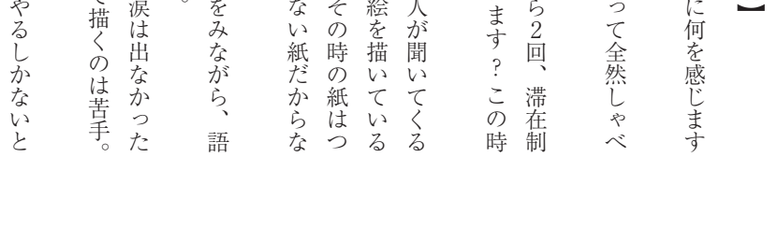
石　どんだけ展示したか覚えていない。

竹　一昨日も広報誌に使いたいという話がきていました。

石　展示の依頼がくると緊張する。

角　そうですよね。知らない人からどんどん依頼が来てびっくりしますよね。

石　この絵がこんなに凄いんだって。ただ描いただけなのに。



角　まだ認められた実感がない？

石　ない。

角　まわりの人はみんな、いいね、いいねと言うけどね。

石　自分としては実感がない。

角　外で作品を作るのは嫌ですか？

石　また描こうと思って。でもその時描いた絵は途中でやめた。紙も違うし。

角　自分の作品が展示されることに何を感じますか？

石　やっぱり緊張する。無口になって全然しゃべらない。

角　アートキャンプで石栗さんから2回、滞在制作してもらったのを覚えています？この時はどうでした？

石　緊張しまくったね。いろんな人が聞いてくるし。集中できないよね。普通絵を描いている紙はガサガサしているけど、その時の紙はつるつるしていてさ。普通使わない紙だからなんか違う感じだった。

角　いろんな人が展示している絵をみながら、語りかけていく感じでしたよね。

石　泣いちゃった。なんとなく。涙は出なかったけど。みんな観すぎで。人前で描くのは苦手。

角　嬉しいってこと？

石　悲しすぎて。嫌だった。でもやるしかないと思っていた。現実はこうなんだなと。

角　でも次の年も、アートキャンプの展示に絵の道具を持ってきてくれましたよね。なんでですか？

石　また描こうと思って。でもその時描いた絵は途中でやめた。紙も違うし。

角　外で作品を作るのは嫌ですか？

石　嫌というか寒い。風は当たるし。
角　なんか楽しそうでしたけどね。
石　楽しかったけど、こんな展開になるとは思わなかった。
角　自分が見ていた印象では、石栗さんがまわりの人に絵のことを説明していて、楽しそうだなと。
石　ただしゃべりすぎると、絵の制作が進まない（笑）。どっちを進めたほうが良いのか迷った。
角　人に絵のことを話すのはどうなんですか？
石　苦手。嫌ではないけど。
角　人に自分の絵をどういう感じで観てもらいたいですか？
石　ただ観ているだけ。あんまり質問されたくない。
角　今後、また絵を描き続けていきますか？
石　一回休んで、考えて考えて夏ぐらいから描こうかな。
角　そう言えば、年賀状、ありがとうございました。嬉しかったですよ。凄く細かくて。飾ってありますよ。
石　だって、年賀状ってみんなつまんないじゃない。
角　迷路、やりましたよ。実際迷路に挑戦して、挑戦してさらに石栗さんの絵が好きになりました。迷路をやってみるとより細かい部分のこだわりが分かりますね。
石　ありがとうございます。
角　竹石さんから見て、絵が注目されてから石栗さんの変化はありましたか？
竹　そうですね。細かいタッチでよく集中力がそんなにもつなと。このことは今も昔も変わらないですね。ただ、アイデアの部分が変わったと思います。地図を参考に絵を描いたり。そして、東区から新潟市全体、新発田市、長岡市での展示、そして滋賀県まで展示がひろがって、ただただ凄いなと思うばかりです。観てもらう機会は重要だと。なにより、石栗さんだけでなく、お母さんが非常に喜んでくれていることが嬉しいですね。お母さんは、一番長く石栗さんの横で絵を描いている姿を見ているわけなので。
角　まさしく、そうですよね
竹　お母さんやお姉ちゃん、絵を見てくれた方もそうなんですけど、まわりを変えていく力って凄いなと実感しています。
角　あっという間に時間が過ぎてしまいました。ＮＡＳＣとしても今後もサポートできることがあれば協力させていただきます。展覧会が増えすぎて大変だとか。
石　展示をどっかでやめちゃうとか（笑）。
竹　やめちゃうの？
石　どこかでお断りすることもあるよね。
竹　どんどん作品が外に出ていく機会が増えていますからね。テレビで石栗さん、映ってたよと他の利用者さんからも聞きましたし。
石　テレビに顔が映ったら今後の展示も考えるよね（笑）。顔が映るのは嫌だし。
角　顔が映るのが嫌だと言っている中すみませんけど、これから石栗さんの写真撮影をさせてもらってもいいですか？
石　はい（笑）。先にトイレ行ってもいい？





コラム

新潟県障害福祉課
地域生活支援係長
渡辺 茂樹

県では、毎年、新潟県障害者芸術文化祭を開催している。内容は、美術・文芸作品の展示やステージ発表などであり、コンクール形式で実施している。どの作品や発表も観る人に感動を与える大変芸術性の高いものである。毎年出品や発表する者もおり、創作活動を通じて自らを表現する機会を得ることで生活を豊かにする一助となっている。

一方で、人に観てもらおうと考えず、発掘しなければ日常の中で消えていく作品が存在することをＮＡＳＣに関わって初めて気づかされた。福祉施設で創作活動を行う環境は整っていると考えていたからである。だが、誰かが芸術作品だと評価しなければ、世に出ないケースもあり得るのである。改めて、障害者の芸術文化活動を振興していくためには、発掘や評価を行う者の養成、作品の保管場所・方法、権利保護などの解決すべき課題があることを痛感している。

今後、福祉施設等での調査が進み、これまで眠っていた作品を発掘できる機会が増えていくと考えられるが、発掘を効率的に実施するためには、福祉施設等の職員への権利保護の研修に加え、審美眼を高くする研修なども必要になってくるのかもしれない。

アール・ブリュットが人と地域を変える　のぞみ工房

＜ Interviewee ＞
社会福祉法人のぞみの家福祉会
就労継続支援事業 B 型事業所・生活介護事業所　のぞみ工房
荒尾和志（所長）
保田健太郎（主任・サービス管理責任者）

＜ Interviewer ＞
角地智史（新潟県アール・ブリュット・サポート・センター アートディレクター）

photo by　衣笠名津美



平成26年から新発田市において、アール・ブリュット展を開催しているのぞみの家福祉会。今年で3回目の開催となりますが、職員が一丸となって手作りの展覧会を開催しています。その仕掛け人である荒尾さんと保田さんにアール・ブリュット展を開催することの意義、そして今後の展望について聞いてみました。

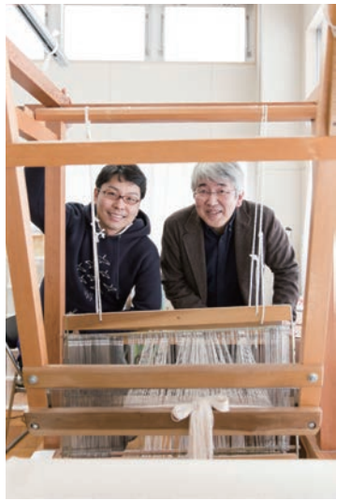
荒：荒尾和志
保：保田健太郎
角：角地智史

【企画展を開催したきっかけ】

角　のぞみの家福祉会では、積極的にアール・ブリュットの展示を開催していますが、今日は始めようとしたきっかけと、やってみてどうだったかお聞きしたいと思います。

荒　緊張するね。いつも通りでいいの？

角　どうぞ、いつも通りで（笑）。企画展を手作りで職員を巻き込んで開催しているじゃないですか。自分の法人から作品を集めてやられたのが第1回目だったと思うんですけど、それをやってみての効果といいますか、反響と言いますか。2つの視点から聞いてみたいんですけど、1つは職員としての反響。もう1つは利用者からの反響。やった後と前では効果や、変化は見られましたか？あわせて、作品展を続ける中で、変わってきたことと変わらないこと。それを踏まえてこれからの展開をお聞きしたいと思っています。まずは、はじめたきっかけを教えてもらえればと。



荒　きっかけはアメニティーフォーラムに行ったことですね。もともとアール・ブリュットは知っていたんだけど、実際見てみてなんか企画展をできそうな気がしたことと、あと凄い作品はあるんだけど、身近な作品の展示もあったのでこのくらいのものでも展示しても良いんだと思った。

保　そのまま1年ぐらい過ぎたんでしたっけ？

荒　2年ぐらいすぎましたね。実際やりたいという思いはあったんだけど、じゃあどうやったらできるかな、例えばいくらぐらいかかるのかとか分からないし。でもやりたいよねという思いはずっとあった。ある時、地元誌に今展示会をやっている長徳寺で別の作品展があったんですね。その時の写真を見て私たちがやりたいことだなと。

保　その記事が出たのが、企画展をやる前の1年前ぐらい。

角　アメニティーフォーラムに行って、なんでできると思ったんですか？

荒　大変な大作もあったんだけど、ちょっとほっとするような作品もあったから。こういう作品見たことあるなと。実際にアール・ブリュット展を見たのは初めてだったので、展示の方法なんかもメモをとらせてもらって、こういうものがあればできるんだなと勉強しました。

保　会場の方に事情を説明して、レイアウトをスケッチさせてもらいましたよね。あとは福島県のはじまりの美術館に職員で見学に行ってきました。作品展なんかにいくと、作品よりも展示の方法が気になる（笑）。

角　いざやってみてどうでしたか？苦労話なん

荒　1年目はいっぱい集まった。

保　アール・ブリュットの定義もよくわからなかったので、これ大丈夫かというものも結構ありましたよね。

荒　ありました（笑）。描かせられてるみたいな。

保　展覧会にあわせてつくった作品もあったみたいです。施設の職員と話をさせてもらって、展覧会の趣旨を説明し断った作品も何点かありました。

角　実際行ってみて、ちょっと違うんじゃないかと。

荒　習字はお断りしましたね。詩は展示したけど。

【一人ひとりの小さな行動が興味の的に】

角　実際展示した反響はどうでした？

保　新潟市美術館の館長が観に来ました（笑）。全然、来られるイメージが出来ていなかったので対応に困りましたけど。館長だけでなく、美術関係者からもスラーっときてもらい良かったよと言ってもらえることが全然イメージできていなかったので驚きました。法人内部の職員や、福祉関係者だけだと思っていたので。

角　自分も丁度、活動を本格的にはじめだした時期で、館長とちょうど新潟市内をまわっていた時だったんですよ。そんな中、新発田市でアール・ブリュット展が開催されると聞いたので、これは行こうと（笑）。

保　2回目は色んな方が来られることは予測がついたけど、1回目の衝撃は大きかった。福祉の枠を超えた方がきていましたね。

角　日常的に福祉と福祉以外の人が関わる場って少ないじゃないですか。展覧会を開いたことにより法人全体の幅も広がった感じですか？

荒　そうですね。展覧会を観て、そのあと外で感想を語り合っている姿を見て嬉しかったですね。なんか文句も多少言われるかと思っていたんですけどなかったですね。否定されるんじゃないかと。

保　当事者の家族からも勇気づけられましたといった声も聞けましたし。

角　作家さんや利用者さん、その家族で展覧会後に何か変化はありましたか？

保　毎年、展覧会を楽しみにしてくれている人はいますね。自分で作品を準備して持ってきてくれた方もいます。そういう場があるといいんだなとやってて思いましたね。

角　大きな特徴として、職員の方がみんなで協力して手作りで展覧会をつくっていくことがあげられると思います。最初見た時はびっくりしました。素人ならではの狂気といいますかも含めて。まったくはじめてだったわけじゃないですか。

荒　作品はとにかく、数が集まらないといやだったのでよびかけて見に行って、お話を聞いての繰り返しでしたね。アール・ブリュットという枠はつくっていましたけど、そんなに厳しくはしなかったかな。他の法人の事業所にも文書でお願いはしました。

角　実際、集まりましたか？



保　狂喜乱舞していましたかね（笑）。

角　まるごと襖を持ってきたり。利用者と日常的な関係性がないと無理ですよね。

保　その間、その方の家の襖はないと（笑）。

角　それでも作品を出展するんですね。

保　出展どころか、ボランティアまでやってくれましたよ。光る棒を自分で買ってきて交通誘導をやっていました。

角　毎年、展示自体も手伝ってくれていますよね。

保　よばなくても来るんですよ（笑）。

角　最初、スタッフの方かなと思いました。

保　展覧会をやってみて、一人ひとりの小さな行動にも目が留まるようになりましたね。靴の脱ぎ方とか、服の畳み方とか。

荒　あと、知らない人がたくさんくるようになりましたね。新聞社とかテレビ局とか。

保　地元のフリーペーパーなんかにも紹介されるようになりましたし。

【アール・ブリュットとは】

角　新たなつながりがどんどんできていますね。これからの展開について、ざっくりで良いので考えていることを教えてください。

荒　悩みなんですけどアール・ブリュットとは何かをやればやるほど分からなくなります（笑）。

保　1年目にやったように、誰でも良いよという場があってもいいと思っているんですね。出したいならどうぞみたいな。一方で、一定の線引きをした展示をやってもいいかなと思っています。

角　両輪でやっていくわけですね。ごちゃまぜの場と、作品として特化した場と。

保　あと新発田市の展示は、静かに観るという場ではなく、職員がにぎやかに説明するというスタンス。のぞみ工房が実施する限りこのやり方なのかなと思っています。その分、作品について語れる背景やポイントを職員一人ひとりが語れるようにしておく必要があると思っています。

角　今後もぜひＮＡＳＣで関われることがあれば、ご連絡ください。今日は、ありがとうございました。





色とりどりの作品に囲まれた一家　石塚香菜

＜ Interviewee ＞
石塚香菜

＜ Interviewer ＞
角地智史（新潟県アール・ブリュット・サポート・センター アートディレクター）

photo by　衣笠名津美



長岡市で開催したアール・ブリュット展in長岡に作品を出展した石塚杏珠さん。コピー用紙で作成した自作の服を人形に着せ替えたもの、粘土で作った食べ物などを自分の思いのまま自宅で展示しています。気が付くと生活スペースにどんどん進出していることも。そんなせめぎ合いの中で杏珠さんのお母さんである香菜さんに、杏珠さんの創作について率直に感じていることを聴いてみました。

石：石塚香菜
角：角地智史

【日常のやりとり】

角　杏珠さんがこれだけいろんなものを作っていますが、作品を家の中に並べておきたいという気持ちが強いですよね。その時にどこまで許すかは、なかなか難しいのかなと思うのですがその辺をどのようにバランスをとっているのかなと。

石　そうですね。気がつくと進出しているので（笑）。一個出したら、別のものをこっそり片付けるとか。拡大していかないように工夫しています。最近は、新しいものを作るというよりもあるものを並び替えている感じですね。その中で、いらなくなったものはポイみたいな。自分でいらないと思ったものは捨てたり、空の缶の中に入れています。

角　見てみるとこの缶の中にも面白そうなものがいろいろと詰まってそうですね（笑）。

石　わちゃわちゃと。本物のお皿はあんまりつかわないですね。タッパはよく使っています。タッパというよりもタッパのふたをお皿代わりに使っている感じかな。使う頻度の少ないものはそのまま使わせています（笑）。

角　確かに日常的によく使うものは交換しないと困りますよね。杏珠さんは蓋を交換しても問題ないですか？

石　ないですね。無いと分かれば粘土でお皿をつくったり。無ければつくるし、作る材料がなければ何かで代用する感じですね。

角　杏珠さんの作品って、そういった要素がありますよね。これがだめならあれにしようとか。例えば作っているものも、お寿司とかは自分でつくるけど、作らずにチラシの切り抜きで代用するものもある。あれは、つくれるかつくれないかの境目なんですかね。そこらへんはちょっと分からないですけど。でもケーキだからと言ってなんでもいいわけではないみたい。その中でデザインは重視しているみたいです。

角　チラシを使うのも、このチラシを使いたいというこだわりもあるんですか？

石　うーん。そうですね。チラシね。よくわからないですけど、ケーキ屋さんのチラシは好んで見ている気はします。クリスマスシーズンになるとコンビニやスーパーなどいろいろとチラシが出るじゃないですか。それはあんまり見向きしなくて、ケーキ屋さんのチラシを見ていますね。あと、定期的によくチェックしているのはホームセンターの食品館のチラシと、家電量販店のチラシ。それは切り抜くことはしないけど並べておきたいと。

角　家電量販店のチラシも好きなんですね。

石　小さいときは電気屋さんのチラシを持つと落ち着くので、それをもって保育園に行っていました。思うにロゴが好きなんじゃないかと。

角　チラシのデザインとかロゴだとか。確かにインパクトのあるチラシですよね。

石　そうですね。同じお店のチラシでも時に白黒のものもあるわけですよ。カラフルじゃないものはいらないみたいですね。

角　好きなものがはっきりしているなと感じました。例えば、チラシ以外で切り抜こうとした

【アール・ブリュット展 出展前後のエピソード】

角　長岡展で杏珠さんが大事にしていた作品をゴソっと貸してもらったんですけど、その時はどうでした？

石　あれ？って顔をして「りかちゃん、りかちゃん」って言ってましたね。どっか隠したんでしょって顔をしていました（笑）。

角　僕らが作品を預かっていて自宅に作品はないのですが、どうやって納得してもらいましたか？どう説明されたのかなと。

石　りかちゃんは、出張中と伝えました。

角　それで納得しました？

石　最初は家の中を物色していました。でも無いのが分かれば納得してそこでウワーッと怒ったり泣いたりすることはなかったんです。次の日起きて、もしからしたらあるのかもというところはあったみたい。

角　いろんなものの中で特に、『りかちゃん』のワードは出ていましたね。

石　『りかちゃん』のワードは出ていましたね。一番のお気に入りなのかな。妹が人形をさわるとすぐに取り返していましたし。

角　預かったのは1週間ぐらいでしたかね。その間の様子はどうでした？

石　最初の1～2日間そわそわしただけで戻りましたね。



角　借りる身として安心しました。その後、展示を見に来てくれたわけですがその時の様子はどうでした？

石　ここにあったのねと（笑）。凄くにこにこして、さあ持って帰りましょうと。そういえば、すぐに手にとったのは『りかちゃん』でした。

角　捨てられたのはないという安心感ですかね。

石　持って帰って、また家に並べなくっちゃと考えていたみたいでしたけど。

角　当日、凄い勢いで作品を持っていこうとしていました。あの時も『りかちゃん』を最初に手に取ったんですね。帰り際に『りかちゃん』を返してもらったんですけど、どうやって納得してもらったんですか？

石　本人は、自分でもって帰ろうという気持ちはなくて私に任せたぞという感覚だったみたいです。なので、私がきちんと持って帰ってきてくれるだろうと。

角　その後、数日後に作品をお返ししたのですが、どんな様子でした？

石　最初、箱を見た時はプレゼントだと思ったみたいですよ。凄く喜んで箱を開けたんですけど、ああこれかと（笑）。でもこれだったら『りかちゃん』が入っているかもと中身を漁って。これがきっかけに『シルバニア』のおもちゃも並べだすかなと思ったのですが、それはなかったですね。自分が必要としているものを取捨選択しているみたいです。

角　展覧会後の変化はありましたか？

石　「アール・ブリュット in 長岡、終わっちゃった」って言ってましたね。

角　そうなんですか。それはなんでろう。

石　「長岡行く？」「アール・ブリュット、終わっちゃった」とボソボソ言って。割と終わっちゃったって本人が嫌な気分の時に出る言葉



で、やりたくないとか行きたくないとかそういう時に出るワードなんだけど、でも「長岡行く？」って言ったりしているし。

角　どういう気持ちなんだろう。いいのかな。

石　そこはちょっと分からないですね。でもにこにこしながら言っているので、そんなに悪い記憶ではないのかな。

角　展示会場ではにこにこしていた感じがしました。るんるん歩いているようにも見えたんですよね。いい思い出としてあるのかな。展示することはお伝えしていたんですか？

石　言っても分からないかなとは思ったんですけど、長岡展のパンフレットに自分の作品が載っているのを見ていましたね。ここに飾るんだよ、ここに出るんだよとは言いました。通じているかどうかはハテナです。

【作品が外に出るということ】

角　はじめて家でつくったものを外に出す機会だったんですよね。何か変化があったのかなと思い聞いてみました。逆に家族も含めて展覧会後の反応はどうでしたか？

石　それこそ家族の中では、表舞台に出ることはないだろうと思っていた作品だったので凄く嬉しかったです。学校の先生も休日だったけど丁度長岡市に用事があると言って観に来てくれて。観に来てくれた先生は嬉しくて嬉しくてと言ってくれました。学校でつくるものと、家でつくるものが違うことが分かって、凄く新鮮だったよと。クラスの子のお母さんも観に来てくれて。

角　学校でつくるものと家でつくるものが違うのは、先生にとっても知る機会だったのかなと。

石　学校は授業の中での創作なので、先生の手が入ったりもするけど。

ものはありますか？本とか雑誌とか。

石　ああ。雑誌はあるかも。ウェディング系の。本を切り抜くことはないかな。自分の描いた絵は切り抜きますね。

角　切り抜いた後は、並べるのが主な目的ですか。

石　そうですね。人として立てたり。

角　生活上、ぶつかることはなかったですか。

石　あまりないですね。タッパも代わりのものを渡せば折り合いがつくし。



角　枠組みがあってこれを作ってねという過程を思うと、また自宅での創作は違う姿が見えるのかと思います。展覧会に出展する機会も出てくるかと思うのですが、杏珠さんの場合は立体作品が多く並べ方にもこだわりがあるじゃないですか。全部保管しておくのも難しいと思うんですけど。

石　つくったものはできればとっておいてあげたいけど、粘土系はカビも生えてくるし（笑）。なのでどうしたものかと。小麦粘土ってつくった直後は柔らかさがあっていいなと思うんですけど、乾いてきちゃうとどんどんボロボロになってしまって。なのでつくった直後に写真だけは撮るようにしています。

角　正直、掃除の時とか邪魔ですよね（笑）。

石　メリハリをつけています。ごめんねと言って一旦並べているのをどかしても、本人はその後せっせと直しています。

角　そして、また作品が増えてますよね（笑）。この作品はなかったなと思って。

石　そうなんです。台がどうしても欲しかったみたいです。漁ってどこかから持ってきたみたいですね。

角　そこから1つこのゾーンが増えたんですね。本当に駆け引きと言いますか、少なくなったり増えたりを繰り返していく感じですね。

【関わって関わって新たな可能性を】

角　この間も写真を撮ろうとしただけで、心配している感じがしました。これからやりたいことや考えている方向性はありますか？例えば、我々サポートセンターにこんな動きをしてもらいたいといった感想でもいいです。

石　そうですね。粘土だったら粘土とこだわってやっているので、こういうやり方もあるのよと本人が理解できるようなイベントや機会があると嬉しいなと思います。あんまり強要してもやらなくなっちゃうかもしれないし。本人の楽しみという視点で。

角　本人にとって好きなことが発見できるような機会ですかね。今、つくる機会はご自宅と学校、そして※『にこ』ですか。

石　そうですね。学校の休み時間、あと『にこ』だと粘土だったり、カラーコピーして何かをつくったり。

角　学校では何をされていますか？

石　学校では絵が多いですね。粘土もちょこっとやったり。あとはお菓子の空箱を使ってお店屋さんごっこみたいな感じで。それもまた並べ方があるみたい。

角　やっぱり並べ方がキーワードですね。

石　他の友達に、並べ替えられたりペースを乱されるとそれは許せないみたい（笑）。

角　NASCでもワークショップのような機会を作りたいと思っています。

石　他の人との関わりの場もいいですね。

角　つくっている人同士の関わりの場ですか？

石　本人同士関わるっていうのは難しいかもしれませんが。

角　ただ、『にこ』の他の利用者でまさに杏珠さんから影響を受けて食べ物系の作品も作り出したと聞いています。なんか、そんな触発される場があるといいですね。

石　最近、その子と若干コラボレーションしているという話もあるんですけど聞いてますか？『にこ』で、その子がつくった果物、さくらんぼみたいなものをちょこちょこっと置くんだけど、これは違うとうちの子がどかすらしいんです（笑）。

角　その子はそこに並べたいんですよね（笑）。

石　そうなんです。その子は空いているスペースを埋めたいって置くんだけど、これは違うってどけるみたいで。でもその中でも何点か許せるものがあるみたいで。

角　その関りは面白いですね。許せるものと許せないものの違いってなんですかね（笑）。

石　ここの場所であれば許せるという範囲があるんでしょうかね。

角　それは不思議なコミュニケーションですね。

石　最近は、立体的な作品はそんなに作っていないですね。

角　学校でも1段だったものを2段にしたりして置き場を工夫しているみたいです。平面の作品、例えば絵であれば比較的保管が簡単なので全て保管しているお宅もあるんですけど、立体作品は中々保管が難しいですよね。

石　これももう少し綺麗に並んでいたんですけど、妹が落としちゃって。本人も直す気がないのかそのままになっています。

角　杏珠さんにとって、理想的なモノの置き方ってどんな状態なんですかね？

石　本当は全部この机に並べたいんでしょうね。

角　作品に囲まれてご飯を食べたいということなんですかね？

石　そう思います。外食に行ってもメニューを置いたまま食べたがるんです。自分の気に入ったページを見ながら。

角　2段3段というよりも平台で並べたいみたいですね。

石　そうですね。ただ、並べられる限度は本人も理解しているようです。

角　それは徐々についていったんですか。

石　最初は、ここまでだよと伝えてアレっ？って反応を示したのですが、限られたスペースで並べてみて本人も気に入ったんじゃないでしょうかね。

角　やってみて、ずらしてみて本人の様子を見て大丈夫そうであればやってみると。話を聞いていると案外受け入れてくれるみたいですね。2～3日は気になっているけど、そのあとはしょうがないなと。

石　他のお友達にいじられるのは嫌みたいですけどね。いじられると奪いにいったりしているみたいです。



石　この前、その子のお母さんと会った時に「なんか、コラボレーションしてんだって」という話になって（笑）。

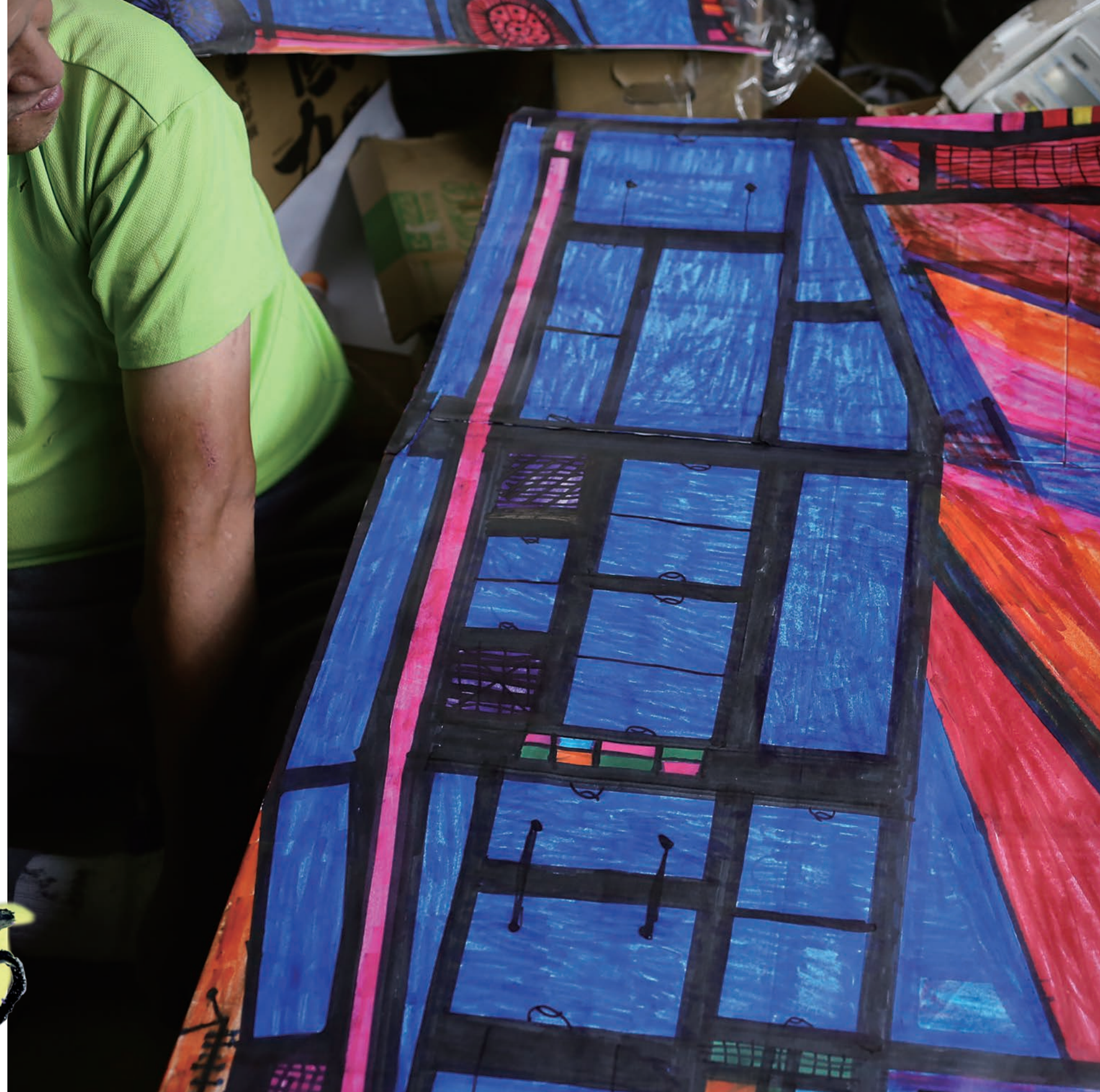
角　いいですね。親御さん同士でも新たな話題が生まれて。近況が似ているといいますか。興味や何かをつくっているという共通の話題があると様々なことがつながりますね。

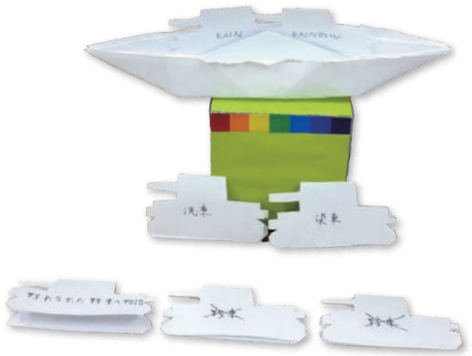
※にこ　社会福祉法人みんなでいきるが運営している放課後等デイサービス事業所



きっかけ

6





同じ夢を見ている

アニメ、ガンダムに出てくる戦車のキャラクターが大好きであったが、後に戦車が人を殺す道具であることを知り、ショックを受けた。以来、戦車を平和なモチーフに変換していくような創作を行う。“戦車”を“洗車”、“染車”として言葉の意味を書き換えたり、「たたかわなかったせんしゃのものがたり」という物語を作ったりと、“平和”へのメッセージを発信し続けている。





S・K

フリーハンドに展開図を書き、車を組み立てる。
施設の送迎車を作っていることが多い。



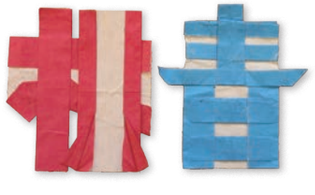
五井 雅人

大小様々な紙を折りたたみハサミで穴を切っていく。朝、施設に入る際に職員さんに渡している。



手塚 里美

縄文やアイヌ紋様にインスパイアされた立体物。
時事問題に触れ描いた絵など、その時感じたことを感じたままに創作している。





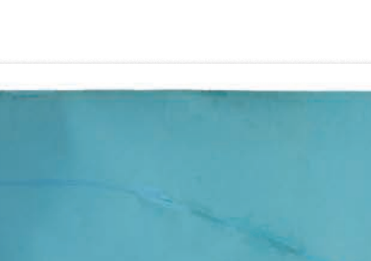
細井 大輔

動物などはもちろんの事、折り紙で様々な文字や数字を折っている。



筒井 貴樹

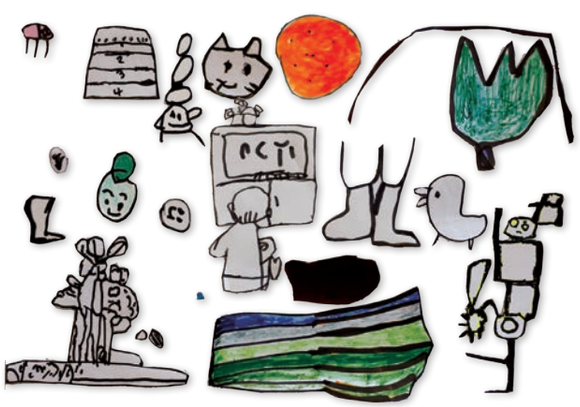
1984 年生まれ / 燕市在住　魚のアメ横と呼ばれる寺泊の魚市場に週に 1 度通っている。すっと車で通り過ぎる間に風景を記憶し、家に戻ってからすらすらと描く。彼の絵の驚くべきところは、寺泊の風景が以前と変化した際 (例えば看板が新しくなった) に、以前描いた自分の絵も変化した部分を切り取り、同じように描き直すところである。そのように彼の絵は更新され続けている。



眞後 麻由子

描かれた絵からはどこか物語を感じる、色鉛筆で紙が凹むほどしっかり色を塗っている。





星野 柚里

ハサミが本当に好きで、描いた絵を本当に細かな線まで丁寧に切っている。



真田 弘樹

チラシの裏に施設職員の名前を丁寧に書く。その紙をそっと職員の机に置いて渡している。

馬場 悠斗

のびのびと気ままに描かれた線や色、幼少の頃から数字を好んで描く。数字は 1 は青、2 は緑、3 はピンク、4 はオレンジと色との関係を持っている。







保苅 彰

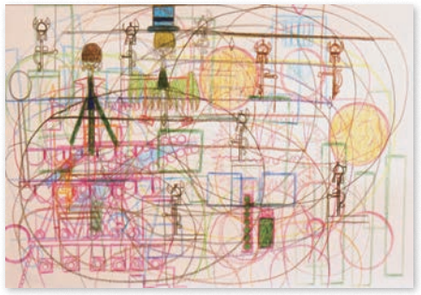
幼い頃から一貫して“侍”をモチーフに絵を描き続けている。どんな大きさの画材にも迷うことなくすらすらと描く。

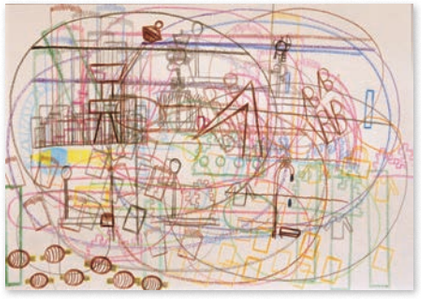


前田 優作

密度を上げていくことに力を注いでいるという年賀状。その緻密さに目を奪われる。







多田 陸

施設の昼休みに、スケッチブックをめくり描きたいページの続きを描いている。



斎藤 誠

1983 生まれ / 新潟市在住　背中を丸め、ぐっとペン先に視線を集中させて描く、その姿からは没頭という言葉が浮かぶ。“カギカギ”と呼ばれているＬの形を繰り返し描く。このシンプルな行為の繰り返しを複雑に方向を変化させながら１枚の紙が埋まるまで行なう。できあがった物には興味はなく、次の紙を出しまた描き始める。



臼杵 由香里

気ままに色とりどりに彩られた丸に独特なリズムを感じる。



坂井 亮円

自分で選び買い揃えるという横糸から、独特な形の裂織りが生まれている。



西沢ゆきこ

古い布にチクチクと糸を刺していく。Tシャツやバックに靴まで！それを着こなす西沢さんのセンスが光る。



新井 里沙

誰に教わる訳でもなく人形を制作。人形が積み上げられた部屋は圧巻！



石栗 仁之

1988 年生まれ / 新潟市在住　作品は一見すると淡彩の風景画のように見えるが、よく見るとびっしりと線が書き込まれていることに気がつく。絵の隅には“スタート”と“ゴール”との文字がある。そう、これは絵全体が迷路として描かれているのである。小学校５年生の時、友人が迷路を書いているのを見て自分もできるのではと書き始めた。それ以来一貫して迷路を書いている。



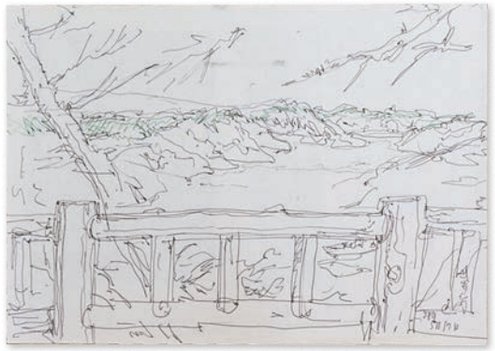
小川 宏史

オリジナルのキャラクターを紙に描くのはもちろん、刺繍としても縫っている。



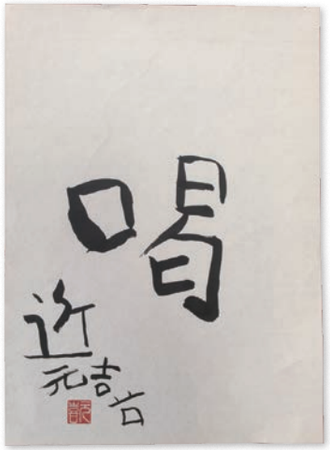
田中勝彦

15 歳よりバスの内装を手がける仕事につくと共に、バスの絵を描き始める。それから 30 年以上経った今でも、当時作っていたバスを何も見ないで描く。



武井 仁司

絵の先生を目指していたという、迷いないスケッチ線と描写力。



近 元喜

大きな体から生み出される細い線。のびのびとした書にほっこりとした気分になる。



嵯峨谷 正敏

1941 年生まれ 佐渡市在住 暑い日も寒い日も、スケッチブックを片手に佐渡の日常の風景を求めて歩く。ここだ、と思う場所に座りペンを走らせる彼の姿は、街のあちこちで見ることができる。街のタクシー会社からは会社の風景を描いて欲しいと依頼され、現在でも社内に嵯峨谷さんの絵が飾られている。油性ペンで描かれた大胆な線と丁寧な水彩の彩りに、独特な雰囲気を持つ。



石川 武

毎年年末になると、その年に訪れた旅行先の風景を題材に木版を制作している。現地で描いたデッサンを基に掘られた版画から、楽しい雰囲気が伝わってくる。

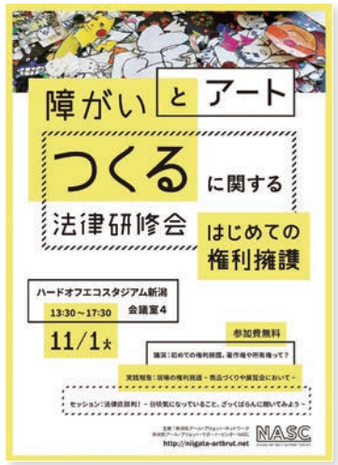


大森 真奈

描かれたキャラクターはよく見ると重なりが。ネット上から自分の好きな画像を集め、組み合わせた創作も行う。

巻末資料 7

広報資材資料



障がいとアート つくるに関する法律研修会
はじめての権利擁護



障がい・アート・ミーティング
～彼の描く、セーラームーンの面白みは、伝わるか～



新発田アール・ブリュット展 2016
～モノ、ガタル、タネ～



アール・ブリュットセミナー in 長岡



記録映像上映
アール・ブリュットが生まれるところ



アール・ブリュット展 in 上越
～この世界の愛し方 Everything is in this world～

情報発信について



【ホームページ】
◆総閲覧数　10,520 件
（平成 28 年 8 月 1 日～平成 29 年 2 月 28 日）
◆掲載記事数　19 件
◆主な内容
・展覧会のお知らせ
・アール・ブリュットにまつわるイベントの広報



【Facebook ページ】
◆ページいいね数　300 件
◆記事投稿数　34 件
◆総閲覧数　20,587 人
（平成 28 年 8 月 1 日～平成 29 年 2 月 28 日）
◆記事最高閲覧数　1,700 人
◆内容
・イベントの広報・事後報告
・展覧会の周知



アール・ブリュット展 in 長岡
～日々是好日 暮らしから生まれるもの～



障がいとアートをつむぐ
つくるを支えるセミナー

発行日 2017 年 3 月
企画・編集・発行
社会福祉法人みんなでいきる

発行責任者：大島 誠
デザイン：小出真吾 (IDEKO)
写真：角地智史、衣笠名津美
イラスト：ワタナベメイ

新潟県アール・ブリュット・サポート・センターNASC
〒943-0834　新潟県上越市西城町 2-10-25-307
社会福祉法人みんなでいきる 内
TEL：025-530-7260　FAX：025-530-7261
MAIL：info@niigata-artbrut.net
HP：http://niigata-artbrut.net/

本書は厚生労働省
「平成 28 年度 障害者の芸術活動支援モデル事業」
の一環として制作しました。


乾杯！
今年は上越妙高駅前
障害者芸術へ前へ


NASC 設立
障害者芸術の普及促進へ


障害者の芸術に光を
来月 支援センター開所


この人と
障害者とアートに向き合う


障害者の芸術活動支援
センター 開設
上越 展覧会開催や作品発掘


長岡


イマジン
湧き上がる魂

放映情報

◆株式会社　テレビ新潟放送網（TeNY）
平成 28 年 7 月 19 日　記者会見

◆株式会社　新潟総合テレビ（NST）
平成 28 年 8 月 3 日　NASC 開所

◆ NHK 新潟放送局
平成 28 年 11 月 20 日　長岡展　12：10 ～
平成 28 年 11 月 21 日　長岡展　18：10 ～

◆ FM 新潟
平成 28 年 11 月 19 日　長岡展　生放送

新聞掲載情報

平成 28 年 7 月 20 日（水）
・上越タイムス「NASC 設立　障害者芸術の普及促進へ」
・新潟日報「障害者の芸術に光を　上越の社会福祉法人　来月支援センター開所」

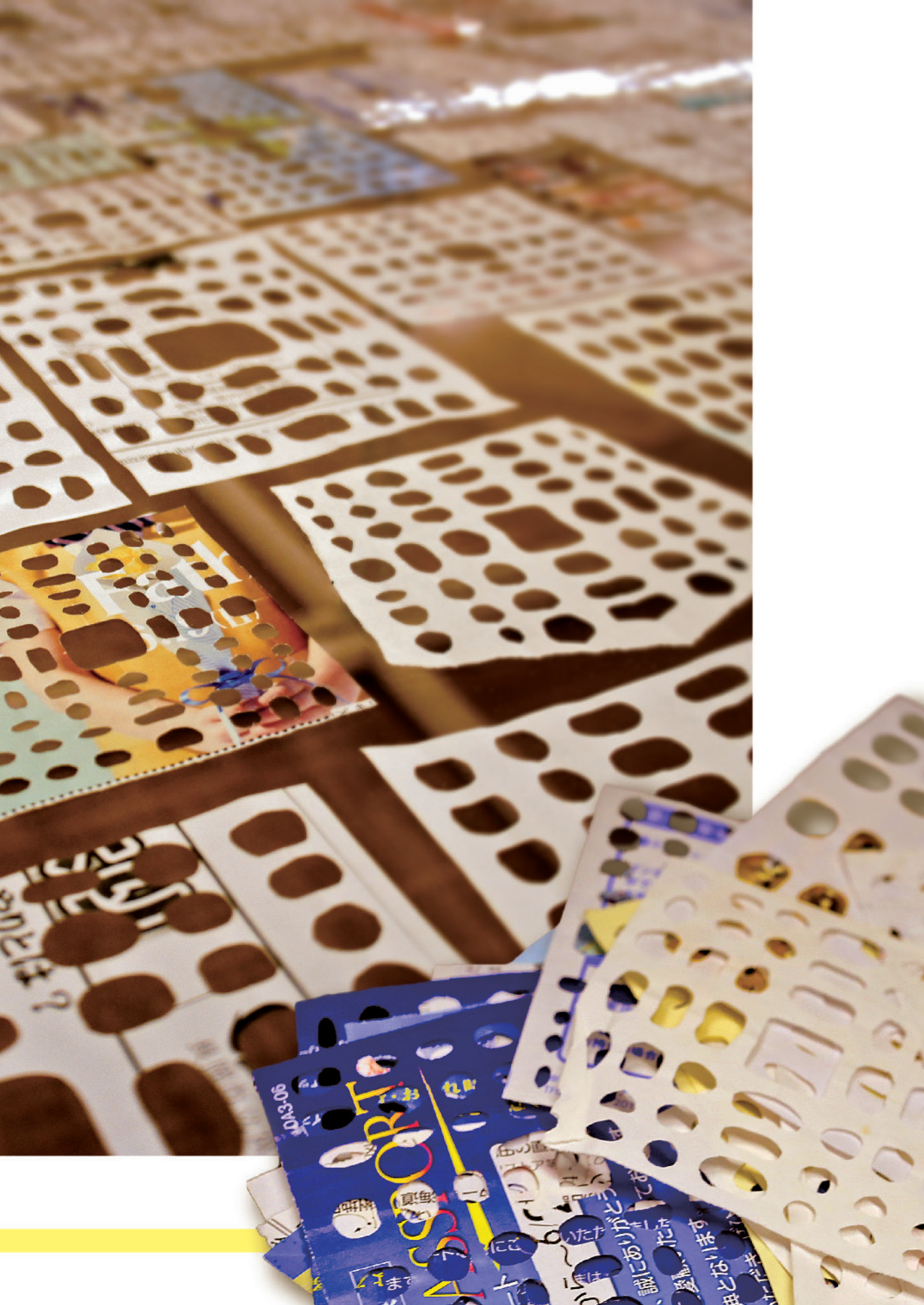
平成 28 年 8 月 5 日（金）
・上越タイムス「障害者芸術〝前へ〟　アール・ブリュット・サポート・センター開設」

平成 28 年 8 月 26 日（金）
・読売新聞「障害者の芸術活動支援　「センター」開設　上越　展覧会開催や作品発掘」

平成 28 年 10 月 23 日（日）
・読売新聞「障害者とアートに向き合う」

平成 28 年 11 月 25 日（金）
・新潟日報「鮮やか自由な感性」

平成 29 年 1 月 1 日（日）
・新潟日報「イマジンー共に生きたい　湧き上がる魂」


DA3-06
CARD